

令和7年度 研究報告書

あゆみ

第46号

視覚に障害のある幼児児童生徒の
自立と社会参加に向けた指導・支援の充実
—「キャリア教育全体計画」を活用した授業づくりと生活指導をとおして—

秋田県立視覚支援学校

令和7年度 研究報告書「あゆみ」 目次

巻頭言	1
第1部 全校研究の概要	2
令和7年度の全校研究について 【資料1～3】	
第2部 グループ研究	
I 幼稚部・小学部グループ 自己理解・他者理解を促すためのソーシャルスキルトレーニングの実践	20
II 中学部グループ 生徒の「やりとりの力」「かかわる力」を伸ばす授業づくりを目指して	24
III 高等部普通科グループ 生徒の「知りたい」「やりたい」意欲を起点とした授業づくり	31
IV 高等部保健医療科・生活情報科グループ 医療科への進学を目指す生徒の生活情報科での取組	38
V 医療科グループ 生徒一人一人の課題に応じた取組	43
VI 寄宿舍グループ 生徒の実態に応じた生活指導の実践	49
あとがき	54

「自立と社会参加」の基盤構築に向けて——研究三年計画の初年度を歩む

校長 伊藤 潤

本年度、本校は教育目標にある「自立と社会参加」を中核に据えた、新たな研究三年計画の第一歩を踏み出しました。その初年度の成果を「研究報告書」としてまとめるにあたり、本校が目指すべき教育の実践的意義について改めて展望したいと思います。

本校で学ぶ幼児児童生徒にとって、自立と社会参加への歩みは多岐にわたります。キャリア教育の起点となる幼稚部においては、核となる体験を通じた概念形成を促し、世界に対する確かな好奇心を育むことが、将来を支える根幹となります。一方で、成人してから本校に入学し、新たな学びを志す方々にとっては、これまでの経験を礎としながら、専門的な知識や技能を修得し、社会的・職業的自立への学びを構築、再構築していくプロセスが、極めて重要な意味を持ちます。

これら全ての段階において共通するのは、一人一人の状況に応じた「学び方」を、自らの力として確実に習得することの重要性です。幼稚部、小学部段階から、自己理解や他者意識を育むことは、自己と他者の考え方に触れたり比較したりしながら学びを深める「対話的な学び」に不可欠となります。また、高等部や理療科において、自らの特性に応じた最適な学び方を身に付け、自ら環境を整える「自己管理能力」を養うことは、将来、社会において自立し、また自分に必要な配慮を具体的に伝える発信力へと繋がります。

本年度は三年計画の初年度として、各学部・学科における課題を精査し、指導・支援の方向性を再確認してまいりました。研究の三年計画はまだ始まったばかりです。本集録に収められた一年目の実践報告を土台とし、我々は今後も、幼児期から成人後の学び直しに至るまで、幼児児童生徒一人一人の変容とニーズに真摯に向き合い、視覚障害教育における専門性を維持・継承していかなければなりません。

本報告書が、次年度以降のさらなる研究深化の道標となり、一人一人の豊かな将来を切り拓く一助となることを期待し、巻頭の言葉といたします。

第1部 全校研究の概要



令和7年度の全校研究について

1 研究主題

視覚に障害のある幼児児童生徒の自立と社会参加に向けた指導・支援の充実
—「キャリア教育全体計画」を活用した授業づくりと生活指導をとおして—

2 主題設定理由

(1) 幼児児童生徒の実態から

秋田県立視覚支援学校（以下、本校とする）は、幼稚部2名、小学部3名、中学部2名、高等部普通科2名、高等部保健医療科1名、高等部専攻科5名の計15名が在籍している。年齢は3歳児から成人の生徒までと幅広く、生活経験や社会経験が一人一人異なっている。いずれも一人学級であり、学習形態も個別で行うものの他、学部や学習グループなど少人数で学習する環境がほとんどである。

また、本校入学に至る経緯については先天性障害によるもののほか、成人期以降に発症した視覚疾患によるもの、視覚だけでなく知的障害を伴うものなど、個々の実態や学力も様々である。そのため、卒業後の進路については、あはき師の国家資格を要する就労の他、一般就労、情報関連の高等専門学校進学や福祉施設入所、福祉的就労等、多岐に渡っている。

(2) 国や秋田県の動向から

特別支援学校学習指導要領では、基本的な考え方として「障害のある子どもたちの学びの場の柔軟な選択を踏まえ、幼稚園、小・中・高等学校の教育課程との連続性を重視すること」、「障害の重度・重複化、多様化への対応と卒業後の自立と社会参加に向けた充実」が示されている。また、第四次秋田県特別支援教育総合整備計画では、重点施策として「キャリア教育全体計画に基づき、個々のキャリア発達を促すキャリア教育の充実」が掲げられている。

(3) 本校の教育目標及び過年度の研究から

本校では、視覚障害のある幼児児童生徒に対し、発達段階に応じた教育を行い、障害による困難を改善・克服するために必要な知識・技能を習得し、進んで自立と社会参加に向かう人間を育成することを教育目標に掲げている。昨年までの2年間「深い学びにつなげるための対話を基盤においた授業づくり」を研究主題として取り組み、一人一人の障害の特性や理解の仕方など、自立活動の指導内容との関連性を踏まえた多角的な見取りによる実態把握とそれに基づいた授業づくりを行ってきた。多くの成果を得た中、今後の展開として幼児児童生徒が学校で学んだことを自身の生活や社会との関わりに結び付け、学んだことをさらに深く理解し、汎化したり発信したりできるような仕組みづくりが課題として挙げられた。

本校の特色として幼稚部から高等部までの一貫した指導体制が敷かれている点が挙げられる。また、少人数であるからこそ、一人一人の実態に応じた学習活動が可能である。そこで、①幼児児童生徒の「なりたい自分はどんな姿なのか」「どう生きていきたいか」という願いを的確に捉え、②自立活動の指導内容を教育活動全体に反映させ、③卒業後や将来に向けて必要な力を段階的に指導することにより、幼児児童生徒が目指す目標に向かって自発的に取り組んでいくことができるのではないかと考え、本研究主題を設定した。

3 研究仮説

授業や生活指導の場面において、幼児児童生徒等の願いに基づきながら現在の実態を適切に把握し、将来的に必要と考えられる力（課題）を設定する。さらに、個々のコアプロブレムに対してキャリア教育の視点に沿った授業や生活指導を段階的に指導・支援することにより、幼児児童生徒が主体的に考え、積極的に社会参加しようとする力を育むことができるだろう。

4 研究計画（3箇年）

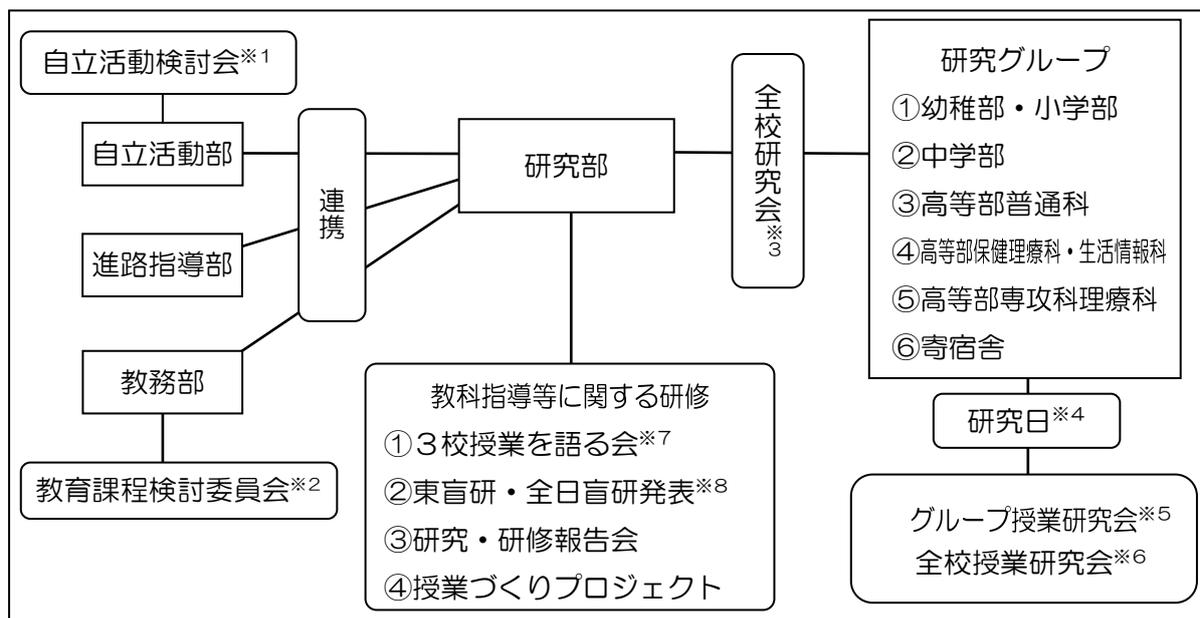
研究3箇年の全体計画は、表1のとおりである。

表1 全体計画

1年目	(1) 研究主題の共通理解 (2) コアプロブレム等に基づいた実態の把握と「キャリア教育全体計画」の整合 (3) キャリア教育の視点に沿った授業実践と分析①
2年目	(1) コアプロブレム等に基づいた実態の把握と「キャリア教育全体計画」の見直し (2) キャリア教育の視点に沿った授業実践と分析② (3) キャリア教育の視点に基づく授業づくりにおける評価と改善
3年目	(1) コアプロブレム等に基づいた実態の把握と「キャリア教育全体計画」の活用 (2) キャリア教育の視点に沿った授業実践とまとめ (3) 3年間の実践を踏まえた仮説の検証

5 研究組織

研究推進に係る研究組織は、図1のとおりである。



※1 自立活動検討会…担任、学部主事、寄宿舍指導員、自立活動部、場合に応じて視能訓練士が児童生徒の自立活動に関わる教育活動上必要な指導内容を整理・検討する会。年2回実施。

※2 教育課程検討委員会…校長、教頭、各学部主事、各学部・科主任、理療科副主任、各教科等主任、研究主任が幼児児童生徒の教育課程について検討する会。

※3 全校研究会…全校研究の概要、各グループ研究の内容等について、全校で共通理解する会。

※4 研究日…各研究グループが幼児児童生徒の実態、研究主題や重点事項等、グループ研究について話し合

う日。月1回開催。

- ※5 グループ授業研究会…各研究グループで行う授業研究会。授業提示後に評価基準、「キャリア教育の視点」に基づいた、ワークショップ型授業研究会を行う。
- ※6 全校授業研究会…年2回、全職員で行う授業研究会。※5と同様にワークショップ型授業研究会を行う。授業改善について外部講師から助言をいただく機会。
- ※7 3校授業を語る会…各教科等の専門性を高めることを目的として、聴覚支援学校、秋田きらり支援学校、本校の3校で授業提示及び参観を実施する。
- ※8 東盲研・全日盲研発表…東北盲学校教育研究大会（東盲研）、東北・北海道理療科教育研究会（理教研）、全日本盲学校教育研究大会（全日盲研）における個人研究の発表。発表者が所属する教科班や学部及び研究部等と連携して研究を進める。

研究グループの構成は図2のとおりで、学校と寄宿舍を合わせて6つのグループに分かれて実践を行った。

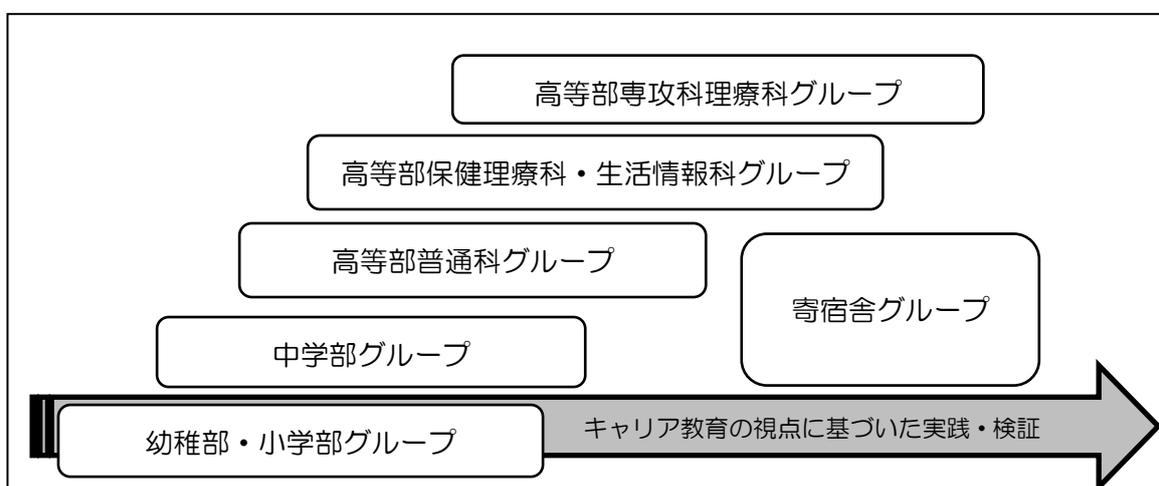


図2 研究グループの構成イメージ

6 研究内容と方法

(1) 研究主題の共通理解

全校研究会やグループ研究会を通じた研究主題の共有と文献・資料でのグループ研修

(2) 教育資料に基づいた実態の把握と「キャリア教育全体計画」の整合

コアプロブレム等を通じた実態把握や「P」「CA・P」「CA」の会での情報共有
学部・分掌間を横断した「キャリア教育全体計画」のすり合わせ

(3) キャリア教育の視点に沿った授業実践と分析

グループ授業研究会や全校授業研究会の実施と事後の分析

7 検証方法

(1) 校内教職員を対象にしたアンケートの実施

(2) 幼児児童生徒の学びの状況等の記録

単元（題材）を通して教師が意図的に設定した学びの状況を、幼児児童生徒のつぶやき、発言、記述、行動等、具体的な姿を記録し検証する。

8 研究の実際

研究関連の年間スケジュールを表2のとおり行い、全校授業研究会を表3のとおり実施した。

表2 研究関連の年間スケジュール

4/17	第1回全校研究会（今年度の研究主題と概要について）
4/21	グループ研究日①
5/21	グループ研究日②
6/9	全日本盲学校教育研究大会東京大会に向けて
6/12	グループ研究日③
6/25	第1回全校授業研究会（高等部専攻科保健医療科3年「臨床実習」）
7/14	全校職員研修会及び第1回全校授業研究会の協議
7/23	グループ研究日④
7/31～8/1	全日本盲学校教育研究大会東京大会
8/22	グループ研究日⑤
9/16	グループ研究日⑥
9/18	第2回全校授業研究会（中学部2年「生活単元学習」）
10/14	グループ研究日⑦
11/6～7	東北盲学校教育研究大会宮城大会・東北北海道医療科教育研究大会宮城大会（オンライン開催）
11/18	グループ研究日⑧
12/18	第2回全校研究会（各研究グループ実践のまとめ）
1/15	グループ研究日⑨
2/3	グループ研究日⑩
2/20	第3回全校研究会（今年度の研究のまとめ）
3/17	研究・研修報告会

表3 全校授業研究会等一覧

	実施日	学部・学年・教科等	授業者	指導助言者
1	6/25	高等部専攻科保健医療科3年 「保健医療科」※【資料3-①】	下地 利秀	秋田大学大学院教育学研究科 教授 前原 和明 氏
2	7/14	全校職員研修及び 6/25 全校授業研究会協議会		
3	9/18	中学部2年「生活単元学習」 ※【資料3-②】	田中 聡子 武田 幸美	

全2回の全校授業研究会及び全校職員研修の実施に際し、指導助言者として秋田大学大学院教育学研究科の前原和明教授を招き、授業参観並びに講義をいただいた（写真1、2）。特に、我々教職員が「職業準備性の視点」や「自己理解の視点」をもつことが大切であること、また、生徒の「課題」だけでなく「芽生え」に着目することの重要性を示唆いただけたことは、今後の授業改善につながる貴重な学びの機会となった。



写真1 第2回全校授業研参観の様子



写真2 第2回全校授業研グループ協議の様子

全校授業研究会グループ協議において主に助言された事項は、以下のとおりであった。

(ア) 「Will(関心・価値観)、Can(能力・強み)、Must(期待・役割)」の3つの視点の理解

児童生徒が自らのキャリアを多角的に捉え、自己の軸を確立するためのフレームワークとして授業に活かせるよう、振り返りの工夫やワークシートの活用などでキャリアについて積極的に考える機会を設定する。

(イ) 内的キャリアの育成

視覚障害によって「Can(できること)」や実績などの「外的キャリア」が制限される場合においても、仕事への意欲や充実感といった「内的キャリア」を探索・拡大することで、児童生徒の自立や社会参加につながる。授業を通じて、児童生徒が「自分自身の軸」を掴めるような支援をしていく。

(ウ) 対話を通じた学びの深まり

学習した成果をもとに、さらに人と関わり、対話し、学びを深めることが大切である。児童生徒が自分の思い(Will)や考えを深められるような場を設定していく必要がある。

9 検証評価

(1) 教職員アンケートの結果より

教職員を対象に「視覚に障害のある幼児児童生徒の自立と社会参加に向けた指導・支援の充実」に関わるアンケートを実施し、今年度の実践について検証した。アンケートは第2回全校授業研究会が終わったタイミングで実施し、研究に携わった教職員42名から回答を得ることができた。アンケートはGoogle formを用いて行った。

設問1「全校研究会や職員研修会、グループ研究会を通じて研究主題を共有することができたか」については、「十分できた」が14%、「ほぼできた」が72%であった。86%の教職員が「共通理解できた」と答えており、自立活動や生活支援の枠組みで捉えたという回答が多かった(図3)。

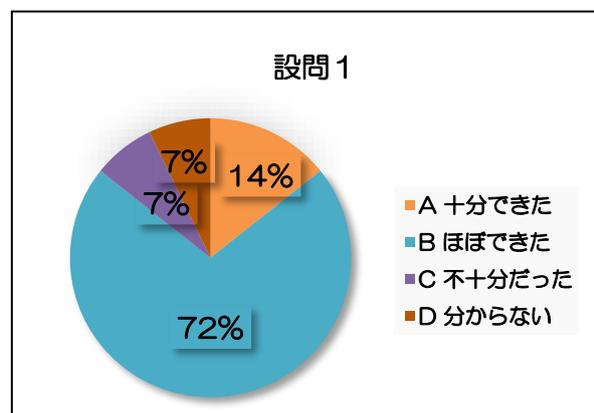


図3 研究主題の共通理解について

設問2「幼児児童生徒の実態把握とキャリア教育全体計画について、コアプロブレム等に基づいた実態把握を行い、『キャリア教育全体計画』との整合を図ることができたか」については、「十分できた」が19%、「ほぼできた」が69%であった。一方、「不十分だった」は12%で、研究グループで実際に重ね合わせをしたところ、重ならない部分も多く、整合性までは難しいと感じたという回答もあった(図4)。

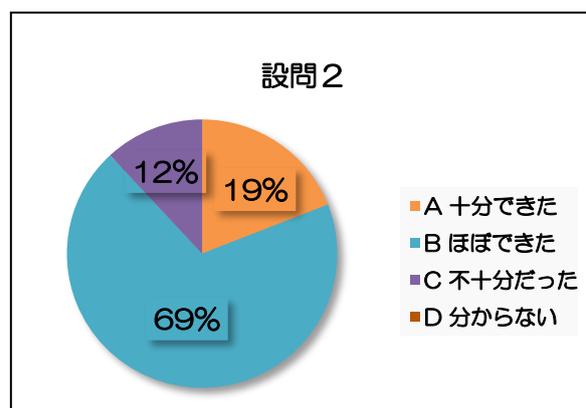


図4 幼児児童生徒の実態把握について

設問3「キャリア教育の視点に沿った授業(生活指導)実践と分析について、各研究グループにおいて授業(生活指導)実践や事後の分析を行うことができたか」については、「十分できた」が17%、「ほぼできた」が62%であった。一方、「不十分だった」は12%で、回答の中には、授業に「キャリア教育の視点」をしっかりと結び付けることで、指導の意図をより自覚できるのではないかという記述もあった(図5)。

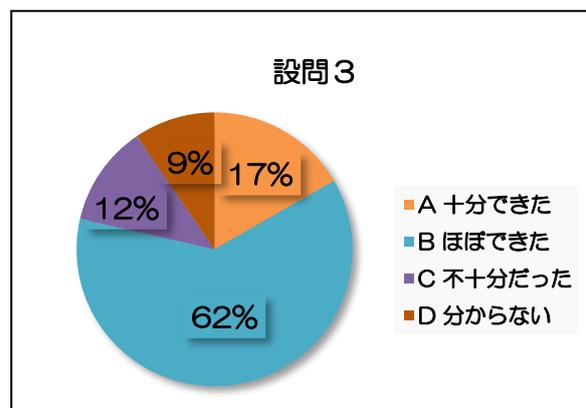


図5 キャリア教育の視点に沿った実践について

最後に設問4「次年度に向けての検討事項について」それぞれから建設的な視点で記述を求めたところ、以下のような回答が得られた。

・学部間の連携意識のさらなる向上

幼稚部、小学部、中学部、高等部という学部の枠を越え、幼児児童生徒の発達段階に応じた必要な力の育成と、学校全体として指導・支援の流れが見えるような仕組み作りが必要。

・学習活動の拡大

授業実践に限らず、学校行事、校外実習、寄宿舎での余暇活動など、生徒の変容が見られる全ての活動場面を研究対象に含めて検証してはどうか。

・研究グループの構成の工夫

今年度は幼稚部から高等部専攻科、寄宿舎まで6つのグループに分かれて実践を行ったが、研究テーマに応じたメンバー構成や、学部を横断した情報交換の場を求める要望もみられた。次年度以降は、より流動的なグループ構成の工夫を要する。

(2) 児童生徒の学びの状況等の記録より

各研究グループにおいて、授業や生活指導の中で、児童生徒がどのような気づきや思考を得たかについて、児童生徒のつぶやき、発言、記述、行動等の具体的な姿を記録し、それぞれ検証を行った。

授業(生活指導)の実践における児童生徒の学びの状況等の記録については、本報告書の「第2部グループ研究」において詳細を記しているの一読いただきたい。

10 まとめ

(1) 成果と課題

本年度は研究の1年目として、キャリア教育の視点を取り入れた授業づくりと実態把握の基盤作りに取り組んだ。成果として、全校アンケートでは85%以上の教職員が研究主題を「共通理解できた」と回答し、校内にキャリア教育の意識が浸透したことが挙げられる。特に、在籍する幼児児童生徒をキャリア教育の視点から多角的に実態把握したことで、一人一人の願いや思いに着目しながら、「将来的に必要な力は何か」を教職員同士で模索し、共有することができた。各研究グループにおける事例検討は、幼児児童生徒の「コアプロブレム」を客観的に分析し、指導の視点を明確にする上で有効であった。

一方で、自立活動の課題と「キャリア教育の全体計画」を具体的にどう整合させるかについては、学部や研究グループによって捉え方に差があることが課題となった。また、複数の担当間での実態把握の手法が有効である反面、時間的負担が大きいという意見も出されており、効率的かつ継続的な研究体制の構築が必要である。

(2) 次年度に向けて

次年度は研究の2年目として、今年度の実践で得られた知見を基に「キャリア教育全体計画」の見直しと活用を図っていききたい。具体的には全校授業研究会で前原教授からの助言にあった「Will、Can、Must」のフレームワークを振り返り活動やワークシートに落としこむなど、幼児児童生徒が発達段階に応じた自らの「軸」を確立し、内的キャリアを探索・拡大できるような支援を進めていききたい。また、研究実践の対象を授業実践に限定せず、学校行事や校外実習、寄宿舎での余暇活動など、幼児児童生徒の変容が見られる全ての場面を検証の場として拡大したいと考える。研究組織については、アンケートで要望のあった「学部間を横断した情報共有」や「流動的なグループ構成」を検討し、幼稚部から高等部までの一貫した指導の流れ「縦のライン」を可視化することを目指していききたい。

「キャリア教育全体計画」を活用した授業づくりと生活指導をとおして、幼児児童生徒が社会との繋がりを感じ、主体的に自立と社会参加へ向かうことができるよう、研究の推進を図っていききたいと考えている。

11 参考文献

- (1) 中央教育審議会答申：「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」、平成23年1月31日
- (2) 文部科学省：「小学校キャリア教育の手引き」、令和4年3月
- (3) 文部科学省：「中学校・高等学校キャリア教育の手引き」、令和5年3月
- (4) 独立行政法人国立教育政策研究所：研究所セミナー 分科会4 概要説明「障害のある児童生徒のキャリア教育の充実に関する研究」、令和7年12月
- (5) 秋田県教育委員会：学校教育の指針「第I章 全教育活動を通して取り組む最重点の教育課題『地域に根ざしたキャリア教育の充実』」、令和7年4月1日
- (6) 秋田県立視覚支援学校：研究紀要「あゆみ」第37号、平成28年3月
- (7) 秋田県立視覚支援学校：研究紀要「あゆみ」第38号、平成29年3月

令和7年度 秋田県立視覚支援学校 キャリア教育 全体計画

学校教育目標、各学部の目標

【本校におけるキャリア教育の目標】

幼児児童生徒一人一人の視覚障害や発達段階、特性等に応じた教育を行うとともに、社会的・職業的自立に必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、**キャリア発達**を促す。※キャリア発達…社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程

【キャリア発達の課題～自立と社会参加のために～】

【本校幼児児童生徒のキャリア発達の課題】

- | | |
|-------------------|-------------|
| 1 興味・関心、意欲的な態度の形成 | 4 歩行能力の向上 |
| 2 的確な概念形成 | 5 日常生活動作の習得 |
| 3 保有する感覚の活用と文字処理 | 6 自己理解と障害受容 |

【幼稚部キャリア発達の課題】

- 遊びを中心とした全体的な発達
- 親への愛着行動によるコミュニケーション
- 豊かな感情の育成

【小学部キャリア発達の課題】

- 自己及び他者への積極的関心の形成・発展
- 身の回りの仕事や環境への関心・意欲の向上
- 夢や希望、憧れる自己のイメージの獲得
- 勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成

【中学部キャリア発達の課題】

- 肯定的自己理解と自己有用感の獲得
- 興味・関心に基づく職業観・勤労観の形成
- 進路計画の立案と暫定的選択
- 生き方や進路に関する現実的模索

【高等部キャリア発達の課題】

- 自己理解の深化と自己受容
- 選択基準としての職業観・勤労観の確立
- 将来設計の立案と社会的移行の準備
- 進路の現実吟味と試行的参加

【視覚障害教育における基礎的・汎用的能力】

人間関係形成・社会形成能力 自己理解・自己管理能力
課題対応能力 キャリアプランニング能力

感覚の情報を処理する能力

- 保有する感覚を利用し、環境と自己との関係を理解して的確な判断や行動ができる力
- 自らのリテラシーを深め、情報機器を含めた補助具を活用する力

※R2 本校研究「視覚障害教育における基礎的・汎用的能力の段階表」を参照

【各教科等におけるキャリア教育にかかわる重点目標】 キャリア発達を促すための教育実践

【キャリア教育の視点】

- 視点1 動く**
主体的に動き、学ぶことの楽しさ・面白さを味わう。
- 視点2 実感する**
体験や学びを通して培われる能力・態度（視覚障害教育における基礎的・汎用的能力）を実感する。
- 視点3 つなげる**
自分で学びの意味や価値を判断し、将来の生活につなげる。

【視覚障害への配慮事項】

※学習指導要領を参考

- 保有感覚の活用、体験とイメージの言語化（視覚的なイメージを伴う事柄への配慮）
- 点字又は普通の文字の読み書きの系統的な指導
点字又は普通文字による的確な理解と豊かな表現力の育成
- 指導内容を適切に精選し、基礎的・基本的な事項の着実な習得
- コンピュータ等の情報機器、触覚教材、拡大教材及び音声教材等各種教材の効果的な活用
- 見通しをもった学習活動の展開（空間や時間の概念を養う）
- 専攻科入学者への社会経験等を踏まえた指導内容の工夫

※この間に各教科・領域の目標が入ります。

キャリア教育推進のための基盤

専門性の向上 職員研修	本人・保護者との共通理解	外部との連携		
		交流及び共同学習や体験学習の環境整備	啓発活動	関係機関との連携
<ul style="list-style-type: none"> 全国・東北盲学校研究大会 校内グループ研究 授業研究会・全校授業研究会 校内職員研修 視覚障害教育・自立活動研修会 	<ul style="list-style-type: none"> 「個別の教育支援計画」等にかかわる個別面談 進路研修 	<ul style="list-style-type: none"> 小・中学校・高等学校・特別支援学校との交流 野外活動、宿泊学習、修学旅行 インターシップ、職場見学、就業体験 	<ul style="list-style-type: none"> ボランティア講座 大学生・介護等体験 点字ブック啓発活動 白杖歩行・生活スキル講習会 理療科リーフレット配布 	<ul style="list-style-type: none"> 秋田大学等との連携 福祉・就労関係機関等との連携

各教科・領域の目標

国語	社会	算数・数学	理科
<p>課 学習課題を理解し、表現の特徴に注意しながら、文章の内容を的確に捉える。</p> <p>キ 優れた表現に接し、それを参考にしながら、展開の仕方を工夫し、自分の考えを述べたり発見したりする。</p> <p>人 目的や場に応じて、効果的に話したり的確に聞き取ったりするとともに、相手の立場を尊重して話し合う。</p>	<p>人 社会的事象に関する様々な意見を知ることで、自分の考えを深め、分かりやすく相手に伝える。</p> <p>課 情報収集の仕方を学び、集めた情報を比較したり、様々な角度から考察したりして、まとめる。</p> <p>自 現代社会の仕組みや課題を理解し、身近な生活や自分の将来と結びつけて、自己の役割や生き方を考察する。</p>	<p>課 数学における基本的な概念や原理・法則の体系的な理解を深め、課題解決する。</p> <p>自 数学のよさを認識し、積極的に数学を活用したり、数学的論拠に基づいて判断しようとしたりする。</p>	<p>キ 自然の事物・現象への関心や探究心を持ち、目的意識をもって観察、実験などに取り組む。</p> <p>人 科学的に探究する能力や自然科学への理解を深め、科学的に思考、判断し、説明する。</p> <p>感 学んだ自然の事象・現象の性質や規則性、有用性などを理解する。</p>

音楽	図工・美術	保健体育	技術・家庭
<p>課 音楽を形づくっている要素を知覚し、曲想や曲種に応じて表現を工夫する。</p> <p>人 他者と協調しながらアンサンブルを行う。</p> <p>キ 楽曲の文化的・歴史的背景を理解し、鑑賞する。</p>	<p>人 作品のよさや美しさを鑑賞する喜びを味わい、自分の価値意識をもって考えを述べたり、友達と批評し合ったりする。</p> <p>自 意図に応じて材料や用具の生かし方などを考え、創意工夫して表現する。</p> <p>課 形や色彩、材料などを構成して、主題の表し方を考える。</p>	<p>自 体調や環境の変化に注意を払いながら、運動を行う。</p> <p>課 自己の目標を設定し、目標達成に向けて主体的に取り組む。</p> <p>人 チームの中で自分の役割がわかり、仲間と協力し合いながら取り組む。</p>	<p>課 ものづくり等の体験活動を通して、生活や産業で利用されている基礎的知識や技術を習得し、活用する。</p> <p>キ 将来の自立した生活に向けて、衣食住の基礎的知識や技術を習得し、活用する。</p>

外国語活動・外国語（英語）	日常生活の指導	作業学習	生活単元学習
<p>人 今後の国際化社会を見据えて、外国語（英語）を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする。</p> <p>キ 聞いたり読んだりして得た情報を、的確に理解したり適切に伝えたりする。</p>	<p>自 基本的な日常生活動作を身に付け、自分から日常生活の諸活動に取り組む。</p> <p>人 あいさつ、言葉遣い、礼儀作法等を身に付ける。</p>	<p>課 働くことに必要な基本的な態度、技能を身に付ける。</p> <p>人 自分の役割を理解し、他の者と協力して作業や実習をする。</p> <p>キ 働くことの意義や働く人々の思いを理解し、将来の働く生活に対する意識、意欲を高める。</p>	<p>課 自立的な生活に必要な事柄について実際の・総合的に学び、課題を解決する。</p> <p>自 単元の活動に目標や見通しをもって積極的に取り組む。</p> <p>人 集団の中で役割を持ち、仲間や教師と共働して取り組む。</p>

療育分野	保育分野
<p>課 三療の基礎的・基本的知識と技術を習得するために、様々な課題を解決するスキルを身に付ける。</p> <p>人 療育の本質と社会的な意義を理解し、患者のニーズに応えるために、知識及び治療技術の向上を追求する。</p> <p>キ 自分の施術技術や態度を振り返り、課題を見つけ改善していこうとする。</p>	<p>人 友達や教師と一緒に活動することを楽しみ、遊びの中で進んで関わろうとする。</p> <p>自 健康な生活のリズムを身に付け、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動に自分で取り組もうとする。</p> <p>課 自分の興味や欲求に基づいて、身近な教師や友達に思いを伝えたり、選択肢の中から選んだりする。</p> <p>キ 生活や遊びの中で、物事を最後までやり遂げようとしたり、きまりを守ろうとしたりする気持ちをもつ。</p> <p>感 音源に向かって移動したり、手を伸ばして触ろうとしたりする。視対象に自ら近づいたり距離をとったりして、自分にとってよく見える状況をつくろうとする。</p>

特別の教科 道徳、道徳教育	総合的な学習（探究）の時間	特別活動	自立活動
<p>人 集団や社会の一員として自覚し、より良い生活を求め、感謝や思いやりの心をもつ。</p> <p>自 自分らしい生き方を考え、学ぶ意欲や態度を身に付ける。</p>	<p>課 自ら課題を見つけ、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を高める。</p>	<p>人 学校行事や生徒会等の集団活動を通して、集団への連帯感を深め、協力して学校生活を築こうとする。</p> <p>自 生活上の諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を身に付ける。</p>	<p>感 学習や生活面で情報を入手するための補助具や器具等（白杖、点字盤、弱視レンズ等）を使用する。</p> <p>人 自己の障害及び他者の価値観や感性を理解し、必要に応じて他者に見え方を伝えたり、援助依頼したりする。</p>

※ 人 は人間関係・社会形成能力、自 は自己理解・自己管理能力、課 は課題対応能力、キ はキャリアプランニング能力、感 は感覚の情報を処理する能力にかかわる目標を示す。

中学部 B 課程の「職業・家庭」や高等部 A1 の「職業総合」を追加していく。

視覚障害教育における基礎的・汎用的能力の段階表

基礎的・汎用的能力・・・「キャリア発達を促す能力」の1つであり、「分野や職種に関わらず、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度」。

	幼稚園	小学部			中学部	高等部	
	人間関係基盤形成の時期	低学年	中学年	高学年	現実的探索と暫定的選択の時期	現実的探索・試行と社会的移行準備の時期	
キャリア発達の段階	進路の探索・選択に関わる基盤形成の時期				現実的探索と暫定的選択の時期		
視覚障害教育の視点からキャリア教育を貫く教育活動	意図的・直接的な模倣や体験による活動				集団における自他の理解を促す活動		
社会生活の場面を想定した活動							
人間関係・社会形成能力	<p>他者や社会との関わりの中で生活し仕事をしていく上で基礎となる能力</p> <p>★具体的な要素 他者の個性を理解する力、他者に働きかける力、コミュニケーションスキル、チームワーク、リーダーシップ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・同年齢の友達と会話する。 ・相手の方向を意識して、話したり、聞いたりする。 ・「ありがとう」や「ごめんなさい」を言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを相手に伝える。 ・他人と自分との感じ方や考え方の違いを理解する。 ・あいさつや返事をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えをみんなの前で話す。 ・他者の話を集中して聞く。 ・周囲の状況を理解したり自分のしたいことを伝えたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・場に合った言葉づかいをする。 ・人の話を聞くときのマナーを身に付ける。 ・思いやりをもち、相手の立場に立って考え行動する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・気持ちや考えを動作や言葉、文字を駆使し、分かりやすく伝える。 ・新しい環境や人間関係に適応する。 ・相手に配慮しながら、積極的に人間関係を築く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・場に合った適切なコミュニケーションを図る。 ・これまでの経験を基に、新しい環境や人間関係に生かす。 ・他者の価値観や個性を理解し、自分との差異を認めつつ受容する。
	感謝・挨拶・返事をする			協力・信頼する	場面や目的に応じたコミュニケーションをする		
自己理解・自己管理能力	<p>「やればできる」と考えて行動するとともに、自らの思考や感情を律し、研さんする能力</p> <p>★具体的な要素 自己の役割の理解、前向きに考える力、自己の動機付け、忍耐力、ストレスマネジメント、主体的行動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分から働きかけて友達と遊ぶ。 ・衣服の着脱、食事、排せつなど日常生活動作を自分で行おうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のできることを積極的に行う。 ・自分のことは自分でする。 ・体調のよい状態や悪い状態を具体的に表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で目標に向かっていこうとする。 ・自分のやりたいこと、よいと思うことなどを考え、進んで取り組む。 ・眼の疾患などにより、気を付けなければならない事柄が分かり、日常的に行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目的や目標の意味を理解し、必要な努力を続ける。 ・自分らしさを発揮し、人に認めてもらおうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会の一員としての参加には義務と責任が伴うことを理解する。 ・自らの考えを絶えず見直し、検討する。 ・場に合った服装を選び、身なりを整える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・理想と現実との葛藤経験等を通し、様々な困難を克服するスキルを身に付ける。 ・自分の適性を理解して、理想に近づこうとする。
	自分で考え行動する			働くことの意義を理解する	就業体験を通して自己の生き方を考える		
課題対応能力	<p>従来の考え方や方法にとらわれずに物事を進めていく能力 情報及び伝達手段を主体的に選択し、活用する能力</p> <p>★具体的な要素 情報の理解・選択・処理等、本質の理解、原因の追及、課題発見、計画立案、実行力、評価・改善</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の好きなことに集中し、苦手なことにも取り組む ・自分でできることを増やす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・約束や決まりを守る。 ・時間を意識して行動する。 ・活動の準備や片付けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で考え行動する。 ・活動に対する見通しをもち、行動する。 ・計画づくりの必要性に気づき、活動の手順を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の得意なことを集団の中で積極的に行い、苦手なことを克服する。 ・時間的な見通しをもって行動する。 ・やることが分かり落ち着いて行動する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・援助を受けずにできる事柄を確立し、援助を受けるべきことが分かる。 ・課題に積極的に取り組み、主体的に解決しようとする。 ・選択の意味や判断・決定の過程を大切にし、結果には責任を伴うことを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会参加するための課題や目標が分かり、実際の場面で自らその達成に向けて努力する。 ・自分の課題や目標に向けて、情報を活用しながら実際場面を通して評価をし、次の課題に向けた計画を立てる。
	決まりや役割を理解する			計画することを覚え、自分の役割を理解する	将来設計と社会貢献の調和を図る		
キャリアプランニング能力	<p>社会人・職業人として生活していくために生涯にわたって必要となる能力</p> <p>★具体的な要素 学ぶこと、働くことの意義や役割の理解、多様性の理解、将来設計、選択、行動と改善</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分でしたい遊びを自分で選んで遊び、その中でルールを理解する。 ・大人の手伝いをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・身近で働く人々に興味関心をもつ。 ・係や当番の活動に組み込み、それらの大切さを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・将来の夢や希望をもつ。 ・決まった役割をやり遂げる。 ・いろいろな職業や生き方があることを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・施設・職場見学等を通し、働くことの大切さや苦勞を理解する。 ・自分の果たす義務や責任について、意識したり話し合いをしたりする。 ・あこがれとする職業をもち、自分で必要な情報を探す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体験等を通して、勤勞の意義や働く人々の様々な思いを理解する。 ・日常生活や学習と将来の生き方との関係を理解する。 ・生き方や進路に関する情報を様々なメディアを通して、調査・収集し活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・将来設計に基づいて、今取り組むべき学習や活動を理解する。 ・自らの能力・適性を的確に判断し、自らの将来設計に基づいて、卒業後の社会参加と進路について決定する。
	働くことを知る			責任をもって行う	将来展望をもつ	課題解決に取り組む	
進路実現に向けて準備をする							
感覚の情報処理能力	<p>保有する感覚を活用し、環境と自己との関係を理解して、的確な判断や行動ができる力。 自らのリテラシーを深め、情報機器を含めた補助具を活用する力</p> <p>★具体的な要素 知識、感覚・知覚、運動、社会性、環境認知、補助具の活用、文字処理、日常生活動作、歩行、障害受容、心理的課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・環境に興味をもち、自ら探索しようとする。 ・介添歩行により、自分の力で歩こうとする。 ・音の聞こえる方向に手を伸ばして触ろうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・できること、できないことを考え、援助依頼しようとする。 ・介添歩行で歩いている場所の変化や周囲の様子を知ろうとする。 ・主体的に物に触れ、大小、多少、長短、軽重の違いを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・視覚の障害により、できないことを他の手段に置き換えられることを知る。 ・歩行時に白杖を使用することにより、いろいろな情報を得て移動する。 ・点字や文字に興味をもち、文章の続きに期待をもって自ら進んで読む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各種補装具を知り、必要に応じて使おうとする。 ・白杖を有効に活用して情報を得ながら、安全に歩く。 ・文章を読み書きする中で表記の決まりを知り活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全に効率よく作業を行うための補助具を知り、活用する。 ・公共の交通機関の利用が安全にできる。 ・パソコンなどの機器の使い方を学び、有効に活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活場面において周囲の状況を把握するための補助具や器具を主体的に使いこなす。 ・生活に必要な範囲で目的地まで単独歩行しようとする。また、未知の場所ではファミリーゼーションを活用する。 ・各種の情報を収集したり探索したりするなどインターネットを活用する。
	外界からの働きかけに興味をもつ			的確な概念形成	行動範囲の拡充	新たな環境への適応	

※視覚障害児・者の特性から職業的（進路）発達にかかわる諸能力には欠かせない領域を「感覚の情報処理する能力」として位置付けた。

★ 参考・引用文献 北海道立特別支援教育センター：平成24年度研究紀要「視覚障害教育における自立と社会参加を見据えた指導の在り方に関する研究～キャリア教育の視点による教育活動の改善・充実～」、2012
秋田県小・中学校進路指導研究会編：「キャリア教育実践ガイドブック」、実業之日本社、2013

高等部専攻科保健医療科第3学年 保健医療科 学習指導案

日 時 令和7年6月25日（水曜日）5校時

場 所 専攻科保健医療科3年教室

指導者 下地 利秀

1 科目（内容）

医療と社会（保健医療概論）

2 単元名

あん摩マツサージ指圧師の開業に関する規則

3 単元の目標

- (1) 施術所の開設に関わる法規について、その内容と意義を理解し、必要な知識や技能を身に付ける。
- (2) 理療師としての社会的責任や法令遵守の意義について考察し、自分の言葉で説明する力を高める。
- (3) 法に則した業務の重要性を理解し、倫理観をもって主体的に学習に取り組む。

4 生徒と単元

(1) 生徒の実態

ア 見え方の特徴

本生徒は網膜色素変性症であり、遠距離視力は左右ともに手動弁である。近距離視力は右目が30cm、左目が40cmの指数弁である。視野は周辺視野のみで、左上部がやや見やすい。平成30年に身体障害者手帳1級1種を取得している。

イ 主な学習状況（基礎学力、学習手段等）

人や物事への関心が高く、好奇心旺盛な姿勢が見られる。誰とでも積極的にコミュニケーションを取ることができ、学習においてもさまざまな人の話を聞きながら理解を深めている。委員会や生徒会活動にも意欲的に参加し、周囲と協力して物事を進める力を備えている。

授業では、音声パソコンを用いてテキストデータを聴取しながら学習に取り組んでおり、生活情報科で身に付けたパソコン操作のスキルを理療科でも活用できている。定期テスト等では、音声デジターをプレクストークで再生しながら、パーキンスプレイヤー（点字タイプライター）を使って解答するなど、国家試験受験に向けた準備を着実に進めている。

一方で、パソコンによるノートテイクでは、内容を正確に記録しようとするあまり聞き返しや確認が多くなり、入力ミスも見られることから、授業の進行が一時的に滞ることがある。また、短期的な記憶力には優れており、授業中に学んだ内容には的確に反応できるが、一定の時間が経過すると内容の想起にやや時間を要する傾向がある。

(2) 単元観

本単元では、あん摩マツサージ指圧師の開業に関する法的規則を学び、理療師として必要な法的知識と倫理観を身に付けることを目指す。施術者の業務は法規により厳密に定められており、規則に基づいて適切に判断し、実践する力が求められる。

本生徒はこれまでに、1年次の「保健理療概論」や2年次の「経営学」などを通じて、医療制度の仕組みや施術者の役割について基礎的な理解を深めてきた。これらの学習を土台として、本単元では、施術所開設に関わる法規の沿革・業務範囲・罰則規定などを扱い、専門職としての自覚と責任意識を高めることをねらいとする。

授業では、施術所の「名称」を題材に、実際に起こりうる事例を想定しながら、生徒自身の視点で考え、教師との対話を通して判断力を養う構成とする。法規に則した適切な対応を考察し、倫理的な視点から説明できる力を育てることで、将来の社会的・職業的な自立につなげていきたい。

(3) 学習指導における留意点

ア 主体的に学習に向かうために

- ・将来の開業を自分事として捉えられるよう、法規の規定を手掛かりに、教師との対話を通じて考えを深める場面を設定する。

イ 気づきや考えを深めるために

- ・判断の根拠を意識するよう、具体的な事例や社会的な影響を含んだ問いかけを行い、多面的な視点から考察する機会を設ける。

5 単元の指導計画

総時数 3時間

小単元（題材）名	主な評価基準 【評価方法】	時数
ア 施術所名称に関する法的制限	思 態 法規に基づき、施術所の名称を考えている。【発言、行動観察】	2 本時 2/2
イ 開設届の構成要素とリスク管理	知 態 開設届の内容を理解し、将来に向けた考察を行っている。【発言、行動観察】	1

6 本時の指導

(1) 本時の目標

法規に則した施術所の名称を自ら考え、その妥当性について法的視点から説明し、将来の開業に向けて意識付ける。

(2) 展開

ア時間	学習活動 学習課題	イ 教師の働き掛けと留意点	ウ 評価基準、評価方法
5分	1 本時の課題を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> 学習課題：施術所の名前が法律に合っているか考えてみよう。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・学習課題を確認する。 	(ア) 本時の課題を確認するよう、生徒のパソコンでテキストデータの「1.めあて」を開くよう伝える。	
10分	2 名前を付ける意味を振り返る。 <ul style="list-style-type: none"> ・身近な経験をもとに、名前に込める思いや印象を考える。 	(イ) 生徒が名前を付けた経験を思い出せるように、ペットや持ち物に名前を付けた体験について問いかけ、共有する。 (ウ) 名称に込められた意味や意図が分かるように、その名前にした理由や与える印象について問いかけ、名称のもつ意義を確認する。 (エ) 施術所の名前にも印象や社会的な意味があることが分かるように、その意義について伝える。	思・態 名前に込められる意味や印象を理解し、自分の言葉で説明している。【発言】
25分	3 施術所の名称について考えを深める。 <ul style="list-style-type: none"> ・自ら考えた名称案をもとに、適切性や法的妥当性について多面的に検討する。 	(オ) 生徒が考えている施術所のイメージが広がるように、「どのような人に来てほしいか」「どのような雰囲気にしたいか」「なぜその名称にしたのか」などについて教師が問いかけ、口頭で整理する。 (カ) 様々な視点から捉えられるよう、「メディカルあんま」「ぜったいなおる堂」「腰痛センター」などの不適切な例を提示し、それらから受ける印象や問題点について質問する。例：「堂とつくると何を連想する?」「なおる、と言い切ってしまうとどう思う?」 (キ) 名称の法的制限を思い出すように、テキストデータの「2.名称の制限」を再生するよう指示し、要点の確認を促す。例：法規の目的に立ち返り「なぜ制限があるのか」「患者に誤解を与えるとどうなるか」といった視点から問いかける。 (ク) ルールを守る意識と職業倫理の関係を考えられるように、「A：法律があるから守る人」「B：法律がなくても守る人」の対比を提示し、どちらがより社会的に望ましいかを問う。	思・態 将来の開業を見据えて名称を主体的に検討し、意欲的に取り組んでいる。【発言】

10分	4 振り返りをする。 ・考えたことや感じたことを言葉にする。	<p>(ケ) 本時の活動全体を振り返れるように、生徒の発言をもとに、感じたこと・難しかった点・印象に残ったことを確認し、併せて、考えた名称について修正の必要がある場合には、どのように変更すべきかを再検討するよう促す。</p> <p>(コ) 学習内容が社会的責任に結び付くように、「開設者としての責任は、名称を考えるとところから始まる」という点を教師が明確に伝え、法令遵守と信頼形成の関係について再確認する。</p>	
-----	-----------------------------------	---	--

(4) 評価

ア 生徒…評価基準を基に評価する。

イ 教師

- ・名称の構成を法的・倫理的観点から考察し、根拠や意義を言語化できるよう対話を通じて理解を深める設定となっていたか。

<p>〈指導案表記の説明〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価基準について 知は、知識・理解、思は、思考・判断・表現、意は、主体的に取り組む態度を示す。 ・自立活動の指導と関連がある留意点については、文頭に自を書いて示す。 ・対話を引き出すための働き掛け（発問、板書、教材等）は太字で表す。
--

中学部第2学年 生活単元学習 学習指導案

日 時 令和7年9月18日（木曜日）3校時
場 所 中学部2年教室
指導者 T1：田中聡子 T2：武田幸美

1 単元名

「（生徒名）クッキング」開店！～手作りお菓子でおもてなし～

2 単元の目標

- (1) お菓子作りの手順ややり方を理解し、教師と分担しながら調理をする。
- (2) 周囲の人からの意見を受け止めながら、より良いお店にするための方法を考え、自分の言葉でまとめて発表する。
- (3) 手作りしたお菓子でおもてなしすることに期待感をもち、周囲の人との円滑なコミュニケーションを心掛けるとともに、進んで開店に向けた準備をする。

3 生徒と単元

(1) 生徒の実態

ア 見え方の特徴

氏名	学年	遠距離視力	近距離視力	最大視認力	備 考
A	2	右 (0.03) 左 光覚	右 (0.03)	右 (0.2) / 3 cm	両小眼球 羞明あり

イ 主な学習状況

対象生徒は、各教科等を合わせた教育課程で学習している女子1名である。日常的に遮光眼鏡を着用しており、文字の大きさは通常24ポイントを使用し、対象物に近づいて見たり書いたりしている。中枢性運動障害により、手指操作や身体の動きに制限やぎこちなさがあり書字に時間を要するため、教師が代筆したり本人の声をタブレット型端末に録音したりして書字に代わる活動を行っている。聴覚が優位であり、耳からの情報を記憶することが得意で、人が話した内容をよく記憶していたり、動画共有サイトで歌を覚えたりすることがある。覚えた曲は身近な教師に披露し、得意なことを表現している。また、自分の考えを内容や順番を整理しながら話し、人前でも堂々と表現することができる。作業学習では、指先の感覚を活用し集中してピース通しに取り組んでおり、生徒が得意とする活動の一つである。

コミュニケーション面では、身近な話題を選び積極的に周囲の人に話し掛け、やりとりを楽しんでいる。一方で、これまで個別または少人数での学習機会が多く、日常的に大人とやりとりすることがほとんどである。そのため、様々な意見に触れる機会や周囲と意見を比較する機会は希薄である。大人とのやりとりの中では、偏った話題で一方向的に話すことが多く、意にそぐわないことを相手から言われたり、話し方や内容が気になったりするとそのことを受け入れられない態度を取ることもある。また、見えにくさから話している相手の表情が読み取りにくいこともあり、やりとりの中で誤解が生じることもある。

(2) 単元観

本単元では、生徒の夢であるパティシエにつながる活動として、手作りしたお菓子で、店を開いてお客さんをおもてなしするまでの学習を行う。本生徒は、お菓子を作ったり食べたりすることに興味・関心をもっており、将来はお菓子を作る場所で働きたいという願いをもっている。これまでお菓子を作った経験はほとんどなかったため、お菓子作りのイメージをもてるように、紙粘土をクッキー生地に見立て、クッキー作りの工程を体験した。クッキー生地の成形に興味を示し、畑に枝豆を植えていたことから枝豆のクッキーを作ることになった。生徒自身が育てた食材を活用することで、関心をもちながら活動することができること、また、学校での調理実習の経験や、母親の手伝いをよくしていることから調理に関する期待感や調理器具等の名前や使い方についての知識をもっているため、意欲的に活動できると考えた。

関わりの中での意味の捉え方や相手の気持ちの読み取りなど、コミュニケーション面の課題を克服するため、本単元では、関心の高いお菓子作りの活動や店の開店に係る活動を通して、接客中の注文や要望を確認したり、会話をしたりする等、様々な状況において関わりが必要な場面を設定している。接客の練習や様々な人を接客するプレ開店や本番の開店を通して、色々な意見に触れながら自分の接客の様子を振り返り、対応の仕方について考え、実践を積み重ねることで、日常生活において、様々な状況や場面で柔軟に関わる力が身に付くのではないかと考え、本単元を設定した。

(3) 学習指導における留意点

ア 主体的に学習に向かうために

- お菓子作りから開店までの活動にイメージや見通しをもつことができるように、実際に手作りのお菓子を試食したり店の雰囲気分かる動画や写真を提示したりする。
- 意欲的に活動に取り組むことができるように、生徒が得意とする絵を描く活動を取り入れ店内の装飾物を作る活動を設定する。
- 自信をもって活動ができるように、生徒の気付きや工夫が見られた点を即時評価する。
- 開店までの一連の活動に見通しがもてるように、活動内容やスケジュールを視覚的に提示する。
- 相手を意識しながら適切な対応を考えられるように、接客時のロールプレイを行う時間を設定する。【深い学び】
- 学習を振り返り、成果や頑張った点を実感したり、次時の活動の意欲が向上したりするように、振り返りシートを準備し、共有する時間を設ける。

イ 自分を認めたり他者との考えを受け入れたりするために

- できていることや自分の良さを実感することができるように、接客の様子を動画で撮影し、良かったポイントを伝え、生徒の良さを認める場面を設定する。
- 自分と他者との評価を比較し、自分も他者も認め合うことができるように、校内の教師から接客の様子を「アドバイスシート」に記入してもらい、様々な意見に触れる機会を設定する。【深い学び】

ウ 状況に応じたコミュニケーションを図るために

- 色々な人や状況で対応できるように、プレ開店や開店時に来てもらう職員に対し、様々な状況を意図的につくるように依頼する。【深い学び】

4 単元の指導計画

総時数 18時間

小単元名	主な評価基準 【評価方法】	時数
ア ずんだチョコクッキーを作ろう	<p>知 調理器具や材料の名称や用途を理解し、レシピの分量を読み取り調理している。【行動観察】</p> <p>思 どのようなお菓子を作りたいか、自分の考えを言葉で発表している。【発言】</p> <p>態 お菓子作りの楽しさを感じながら、たくさんの人に食べてもらいたいという気持ちをもって活動している。【行動観察】</p>	4
イ 開店の準備をしよう	<p>知 適切な接客態度が分かり、実践している。【行動観察】</p> <p>思 どのような接客をすればお客さんに喜んでもらえるかを考えながら接客練習をしている。【発言、行動観察】</p> <p>態 開店することに期待感をもち、進んで開店に向けた準備をしている。【行動観察】</p>	11 本時 9/11
ウ 開店しよう	<p>知 お菓子やお店に関するお客さんからの質問に適切に答えている。【行動観察】</p> <p>思 状況に応じた言葉遣いや態度で、臨機応変に対応している。【行動観察】</p> <p>態 様々な人を接客し、手作りのお菓子を作って食べてもらえる喜びやうれしさを感じている。【行動観察】</p>	2
エ 振り返りをしよう	<p>思 お菓子を手作りしたり、お客さんをもてなしたりする活動を通して、感じたことを言葉で表現する。【発言】</p> <p>態 次はどのようなお菓子を作りたいか、どのようなお店がよいか意欲的に考えている。【発言、行動観察】</p>	1

5 本時の指導

(1) 本時の目標

前時のプレ開店を振り返り、接客するポイントを考える。

(2) 展開

ア 時間	学習活動 学習課題	イ 教師の働き掛けと留意点	ウ 評価基準、評価方法
5分	1 本時の課題を確認する。	(ア) 学習に見通しがもてるように、TV画面に学習内容と学習課題を提示する。	
	学習課題：接客するときのポイントは何だろう？		

10分	2 プレ開店の様子を見る。	(イ) プレ開店の様子を振り返られるように映像を場面ごとに区切り、周りの状況や生徒の発言や行動、態度面などについて言葉を加えたり、質問をしたりしながら動画を見る。(T1) (ウ) 自 自分の頑張りを実感できるように教師から良かった点を具体的に伝える。(T1、T2)	
20分	3 アドバイスシートを見ながら改善点をまとめる。	(エ) アドバイスの内容が分かるように、顔写真や文字を生徒が見やすい大きさに提示する。(T1) (オ) アドバイスシートに示されていることを理解できるように、キーワードをカードにして分類する。(T2) (カ) 見つけた課題を次時の接客練習のポイントとして活用できるように、カードに示す。(T1)	知・思 アドバイスシートに示されていることを分類しながら、接客面で気を付けるポイントが分かる。【行動観察、発言】
10分	4 解決方法を考える。	(キ) 自 課題解決のためにはどのような点に気を付ければよいか導き出せるように、状況に応じたロールプレイをしながら考える時間を設ける。(T1、T2) (ク) ロールプレイを通して改善の様子が分かり、次時の接客練習に生かせるよう、ロールプレイを動画で撮影し、共有する時間を設定する。(T1、T2)	思 課題を解決するための考えを自分の言葉で表している。【発言】
5分	5 振り返りをする。	(ケ) 本時の活動に達成感を得られるように計画表を使って振り返る。(T1)	

(3) 評価

ア 生徒…評価基準を基に評価する。

イ 教師

(ア) プレ開店の様子を振り返り、より良い関わりや接客をするために必要な事柄を理解できるような学習活動が設定されていたか。

(イ) プレ開店の様子を振り返りながら生徒自らが課題に気づき、課題解決に向かうための手立ては適切であったか。

〈指導案表記の説明〉

・評価基準について

知は、知識・理解、**思**は、思考・判断・表現、**態**は、主体的に取り組む態度を示す。

・自立活動の指導と関連がある留意点については、文頭に**自**を書いて示す。

・対話を引き出すための働き掛け（発問、板書、教材等）は太字で表す。

第2部 グループ研究



I 幼・小学部グループの研究

自己理解・他者意識を促すためのソーシャルスキルトレーニングの実践

1 幼・小学部グループの幼児児童の実態と研究の目的

本研究グループの対象幼児児童は、満3歳児1名、年少児1名、準ずる教育課程で学ぶ小学部4年生1名、5年生1名、6年生1名の計5名からなり、全員弱視である。

幼児は、それぞれ火・木曜日と木・金曜日の週2回登校しており、2名が揃って登校する際は、幼児同士の関わり合いが生まれるように、合同での活動を設定している。本校への登校日以外は、居住地域の保育園に通っている。

児童は、各学年1人ずつの在籍で教師との一対一の個別での学習が主である。そのため、同年代の集団の中で周りのペースに合わせて生活をしたり、さまざまな考え方に触れたりする経験が乏しい。小学部では、児童同士が関わり合いながら学習する学び合いの機会として、週3～6時間程度、図画工作、音楽、体育、特別活動において合同学習を設定している。音楽と特別活動については、中学部2名と合同で学習している。また、小・中学部合同で本の読み聞かせをする「おはなし会」や、集まって読書をする「読み活」を週に1回ずつ行ったり、特別活動の一環として、隔週で学部合同の活動で使用する教室の清掃活動を行ったりするなど、集団での活動の機会を設定している。

視覚障害を有する幼児児童は、視覚的情報不足から、事物の概念を形成しにくく、経験不足から物事のイメージが乏しいと言われている。また、他者からどのように見られているかを意識したり、自分と他者を比較しながらさまざまな考え方に触れたりする機会が少ない。見えにくさ・見えなさから、相手の様子や行動に気づきにくく、状況に応じて自ら行動したり、伝えたりすることが難しく、またそのスキルを学ぶ機会は少ない。

このような実態から、社会生活を円滑に送るために必要な対人関係のスキルを学ぶために、ソーシャルスキルトレーニングの要素を取り入れたロールプレイやゲームを通して、ソーシャルスキルの素地となる自己理解・他者意識の育成を目的として取り組んだ。

2 研究計画

(1) 「視覚障害教育における基礎的・汎用的能力の段階表」を基にした実態把握、計画

幼児・児童のキャリア発達について、実態把握を行い、目指す姿について検討する。

(2) 「自己理解・他者意識」に焦点を当て、キャリア発達を促すための実践（10～12月）

小学部3名が合同で、ソーシャルスキルトレーニングの要素を取り入れたロールプレイやゲームを行う。

(3) 実践の評価と改善（10～1月）

実践や日常生活の中での児童の変容や有効だった手立てについて共有し、実践内容を検討する。

3 研究の実践

(1) 「視覚障害教育における基礎的・汎用的能力の段階表」を基にした実態把握、計画

年度当初のグループ研究会で、「視覚障害教育における基礎的・汎用的能力の段階表」を用いて、【人間関係・社会形成能力】【自己理解・自己管理能力】【課題対応能力】【キャリアプランニング能力】【感覚の情報を処理する能力】の5つの観点ごとにキャリア発達の視点から実態把握を行った。それぞれの生活年齢に当たる発達指標が、個々の児童にとってどのような姿を目指すべきなのか共通理解した上で、小学部の児童3名について、「他者を意識した言動」、「相手の気持ちに寄り添う」、「自分の考えをもつ」ことなど課題が見られた。キャリア発達の指標が

ら見ても【人間関係・社会形成能力】【自己理解・自己管理能力】に関わる力を身に付けていく必要があることを共有した。

(2)「自己理解・他者意識」に焦点を当てたキャリア発達を促すための実践①

ア 対象児童と教科等及び単元名

小学部4、5、6学年 特別の教科道徳 「わくわくチャレンジタイム①（ジェスチャーゲーム）」3時間

イ 単元設定の理由

ジェスチャーゲームは、どのような動きをすれば相手にテーマが伝えられるか考える必要があり、相手の気持ちになって考える機会となる。テーマに沿った表現を考えることにより、特徴を捉えて相手に伝えるスキルを身に付けることにつながる。

ジェスチャーゲームは、休み時間等に遊びとして一部の児童が経験しており、活動に見通しをもって取り組むことができると考えた。また、ゲーム形式にすることで、児童が学習活動を楽しみながら「相手に伝えたい」という気持ちや他者意識の育成を目指した。

ウ 具体的な方法と手立て

(ア) 児童の実態に合わせた題材の設定

児童の見え方や生活経験から、大きい動きで表現できるものがよいと考え、日常生活動作をジェスチャーゲームのテーマとして取り上げた。

(イ) 出題する際の視点の明確化

ルールとして「出題者は全員が正解できるように、解答者に伝わるようにジェスチャーをする」ということを毎時間確認した。

また、初めに教師がゲームの見本を示し、どの動きが分かりやすかったか、なぜその動きが分かりやすいと思ったか教師を交えて話し合う時間を設定した。

(ウ) 成功体験の積み重ね

ゲーム直前に担任と相手に伝えるためのポイントを確認しながら、ジェスチャーを考える時間を設定した。また、児童が見通しをもち活動に参加できるように、毎時間の活動の流れを固定した。

また、実践ごとに児童の変容を共有するとともに、児童が相手に伝えるためのポイントを押さえられるように、担任間で児童の実態に合わせた出題テーマや難易度の検討を行った。

エ 成果と課題

(ア) 成果

ジェスチャーゲームでは、教師の見本やゲームを通して「全員が分かる要素を捉えた動き」「細かすぎず、ざっくりすぎない動き」が大切だという考えが児童から挙げられた。このことを全員で共有したことで、解答者側の見方を意識してジェスチャーを考える姿がみられた。また、担任とペアで「もちつき」「綱引き」「シーソー」など2人で表現する必要のあるテーマに取り組んだ際は、児童から「(ジェスチャーの)流れが大事」「息が合っている」「表情」について意識するとよいという考えが挙げられ、教師の動きを意識しながら息を合わせてジェスチャーをしようとする姿が見られた。

児童の実態から、楽しみながら「相手に伝えたい」という気持ちをもてるような題材を設定したことで、児童が自ら活動に参加し、考える姿が見られた。ゲームを通して、「自分の考えが伝わった」「相手の言いたいことが分かった」「もっと詳しく知りたい」という意欲的な発言が聞かれた。

(イ) 課題

ジェスチャーゲームは、身振りや手振りで相手に伝えるため、日常生活で伝える力が身に付いたとは言えなかった。

(3) 「自己理解・他者意識」に焦点を当てたキャリア発達を促すための実践②

ア 対象児童と教科等及び単元名

小学部4、5、6学年 特別の教科道徳 「わくわくチャレンジタイム② (図形伝達ゲーム)」 2時間

イ 単元設定の理由

図形伝達ゲームは、「①出題者は図形を解答者に見せずどのような図形か言葉で説明する」「②解答者は説明を聞いて、図形を描く」という見えにくさのある児童でも取り組みやすいゲームである。

見えにくい児童にとって、言葉で伝えることは必要なスキルである。また、解答者側も、言葉を聞いてイメージするという力を育成するものである。

ウ 具体的な方法と手立て

(ア) 児童の実態に合わせた題材の設定

初めに教師がゲームを一通り見本を示したことで、見通しがもちにくい活動に対して苦手意識をもつ児童でも、ルールを理解して取り組むことができた。児童が言葉で説明しやすい円や三角形、四角形など簡単な形を中心に、「くっついている」「並んでいる」という言葉を引き出しやすい図形や、上下左右などの位置関係が説明しやすい図形、複雑な重なりがないものを検討した(図1)。また、「二等辺三角形」などの算数科で既に学習している言葉を使う際は、児童の実態に合わせて言葉の意味の確認を行った。

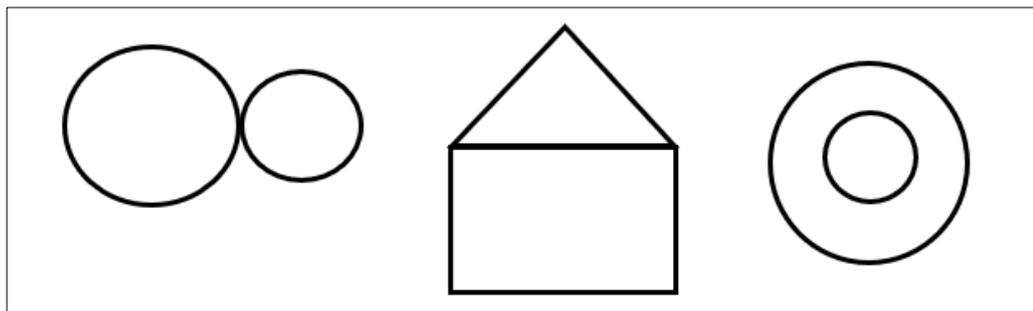


図1 図形伝達ゲームのお題例

(イ) 出題する際の視点の明確化

図形伝達ゲームでも同様に、初めに教師がゲームの見本を示した。見本では、相手に伝わるポイントについて児童が自ら考えられるように、図形についての説明が足りない例を示した。図2は、見本を示した際のお題である。「丸が2つ並んでいる」という出題者役の説明を聞いて、解答者役の教師はそれぞれ図3、4のような解答例を示して、どのように説明すれば相手に伝わるか、どのような言葉を選んで説明すれば伝わるのか教師と話し合う時間を設定した。

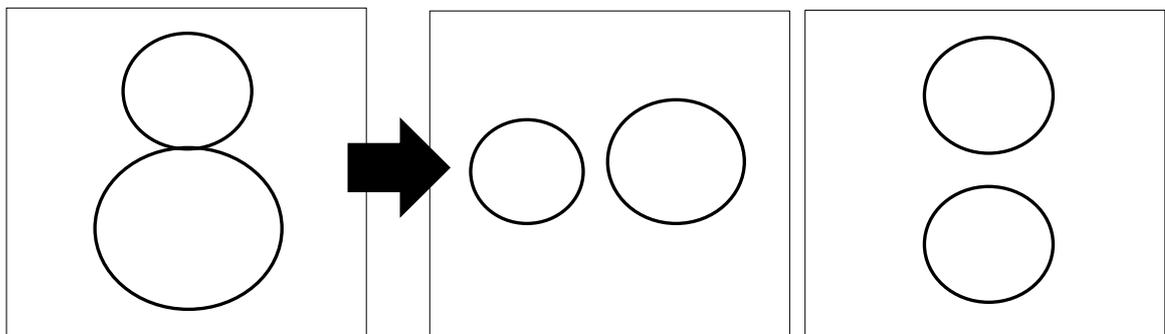


図2 出題したお題

図3 解答例①

図4 解答例②

エ 成果と課題

(ア) 成果

教師の見本のやりとりを見た児童は、分かりやすい説明について話し合いをした際、「2つ目の丸は小さい」「大きい丸に小さい丸がのっている」などの意見を出し合い、児童から「形」「数」「大きさ」「形のある位置（上下左右）」という平面上の図形のイメージを伝えるためのポイントが挙げられた。

さらに、伝えたいポイントを絞って話す速さを工夫したり、特に伝えたい部分を強調して説明したり、聞いている友達の様子を確認しながら話したりする児童もいた。

一方で、相手に説明が伝わらないという場面も見られたが、「自分が言ったことが正確には伝わらなかった」「こう言えばよかった」という自分の発言の振り返る発言が見られ、自己理解という面でも変容が見られた。また、図形伝達ゲームでは、「そう言うと思った」「そうなるのか～」など相手の行動を予想したり、友達の考えを受け入れたりする姿が見られた。最初の説明で全員が正解できなかった場合でも、すぐに諦めるのではなく何度も説明をしたり、児童同士でやり取りをしたりする姿が見られた。

(イ) 課題

日常生活でも他者を意識して伝える力を身に付けるためには、伝わったという経験や伝わる喜びや楽しさを感じたり、日常生活で意図的に他者に伝える機会を設定したりすることが必要であると感じた。

4 研究のまとめ

(1) 成果

ア 「視覚障害教育における基礎的・汎用的能力の段階表」を基にした実態把握、計画
「視覚障害教育における基礎的・汎用的能力の段階表」を用いて、キャリア教育の視点からそれぞれのキャリア発達と指標から実態を捉え、グループ内で共有したことで、幼児・児童に身に付けさせたい力、実践の方向性を定めることができた。

イ 伝え合う力の育成

実践を通して、伝える力だけでなく、最後まで話を聞く、相づちをうつ、「どういう視点で相手の話を聞けばいいのか」といった聞き手側の態度、聴く力が身に付いた。図形伝達ゲームでは、出題者の説明を確認したり、分からないことがあったら質問をしたりして聞いたことを理解しようとする姿が見られた。

(2) 課題

今年度の実践では、ソーシャルスキルトレーニングの要素を取り入れたゲームを行ったが、ゲームを通して気付いた相手に伝えるためのポイントなどを日常生活に汎化することが難しい。また、幼児・児童の実態に合わせて、個別にソーシャルスキルなどを身に付ける必要性も感じた。

(3) 次年度に向けて

ア ソーシャルスキルトレーニングの実践の継続

短時間でも、ソーシャルスキルトレーニングの要素を取り入れたゲームを継続することで、児童のコミュニケーション能力の向上につながることを考える。また、幼児・児童の実態に合わせて、個々に必要なソーシャルスキル習得のための実践を行いたい。

さらに、学部などの小集団の中で話し合い活動などを通して、自分の意見を伝えたことで「役に立った」「認めてもらえた」という経験ができればよいと考える。

イ コアプロブレムやキャリア教育全体計画との関連性や位置付けの整理

コアプロブレムやキャリア教育全体計画と自立活動や研究グループでの実践の関連性や位置づけを整理し、教師間で共通理解を図りながら実践に当たりたい。

II 中学部グループの研究

生徒の「やりとりの力」「かかわる力」を伸ばす授業づくりをめざして

1 対象生徒の実態とめざす姿

(1) 対象生徒と見え方

本グループの対象生徒は、各教科等を含めた指導を含む、知的代替の教育課程で学ぶ中学部の1年生1名（以下生徒Aと記載）と、同じく2年生1名（以下生徒Bと記載）の2名である。

2名ともに幼稚部から本校に在籍している生徒である。見え方の状況は表1のとおりである。

表1 対象生徒と見え方

氏名	学年	遠距離視力	近距離視力	最大視認力	備考
A	1	0	0	0	両先天性無眼球症 知的障害、てんかん
B	2	右 (0.04) 左 光覚	右 (0.04) 左 光覚	右 (0.2)/3 cm 左 光覚	両小眼球症（羞明あり） 知的障害、中枢性運動障害

(2) 主な実態とめざす姿

生徒の実態を「視覚障害教育における基礎的・汎用的能力の段階表」に照らして捉えると、以下のような姿がみられる。

- ・生徒Aは、睡眠や排泄等の生活リズムに波があり、日課に沿った活動に配慮を要する。廊下で会った人にあいさつを返したり、学部集会の場で発表したりするなど、徐々にではあるが他者を意識した関わりに広がりが見られてきている。生徒Bは、自分の考えを順よく話し、弁論大会など大人数の中でも堂々と発表することができる。身近な話題を選びながら積極的に周囲の人に話し掛け、やりとりを楽しむことができるが、日常的には大人とやりとりすることがほとんどである。【人間関係・社会形成能力】
- ・生徒A、生徒Bともに「今までできなかったことができるようになった」など、自己の成長に喜びを感じている。一方、見えない、見えにくいいため活動に見通しがもちにくく、意にそぐわないことを相手から求められた際などは、状況をなかなか受け入れることが難しく、頑なな態度を取ることがある。また、生徒Aは興味の幅が広がらず、余暇の過ごし方に課題がある。生徒Bは中学部になって、作業学習や職場見学等を通して働くことの意義や将来について徐々にイメージをもつようになってきている。【自己理解・自己管理能力】【キャリアプランニング能力】
- ・生徒Aは、自分の好きなことに没頭して時間の切り替えが難しいことがあり、活動に見通しをもつこと、自ら行動することに課題がある。全盲のため、音や触覚による手掛かりで主に情報を得ている。生徒Bは、中学部に進学してから徐々に得意なことが増え、苦手なことを克服しようとする態度がみられるようになってきた。できないことに対しては自ら援助依頼することができる。【課題適応能力】【感覚の情報を処理する能力】

本グループではこのような二人の実態を踏まえ、生徒の興味のある活動をもとに、教師が意図的に人と接する場面を設定することにより、生徒が友達や教師と望ましいやりとりをする力、様々な場面で人と関わる力を伸ばすことができるのではないかと考え、研究を進めることとした。

2 グループ研究における仮説

中学部生徒の興味のある活動をもとに友達や教師と対話する場面設定をし、自分から話し掛ける経験を重ねることにより、生徒の「やりとりの力」「かかわる力」を伸ばすことができるだろう。

3 研究計画と方法

- (1) 研究主題の共有と文献・資料を使ったグループ研修
- (2) 教育資料に基づいた実態の把握と「キャリア教育全体計画」の整合
- (3) キャリア教育の視点に沿った授業実践と振り返り

4 研究実践

(1) グループ研修

夏季休業中に研究グループの研修として「インシデントプロセス法※」を用いた生徒の事例検討会を実施した。

※インシデントプロセス法とは、実際に起こった出来事を分析し、問題の解決方法を考える事例解決法の一つである。

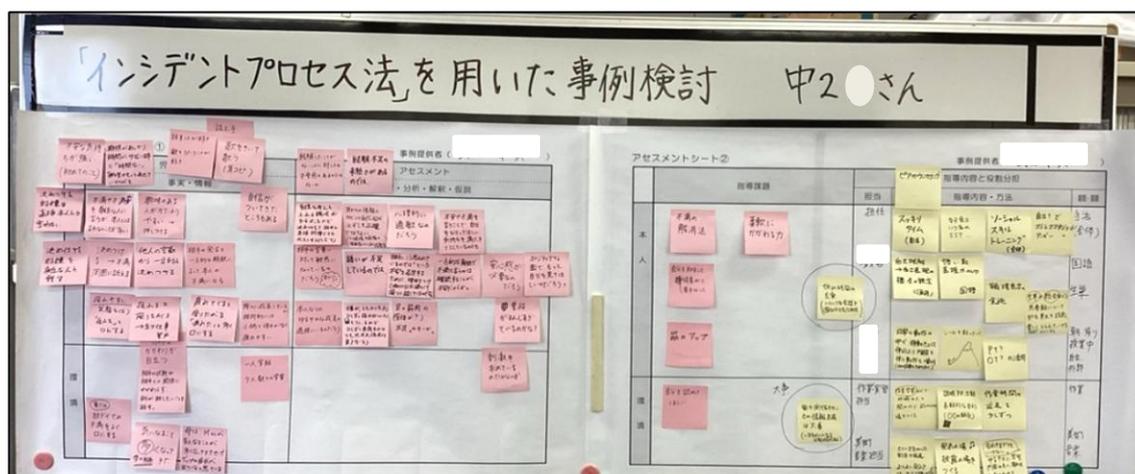


写真1 生徒Bに関する事例検討の表

研修ではアセスメントシートを使って、生徒の事実・情報を付箋に記入したものを「本人」と「環境」に起因するものに分けて貼り出した。それらを分析・解釈して指導課題として挙げ、誰がいつ、どのような内容と方法で指導するか、具体的に意見を出し合った(写真1)。

主に指導課題として挙げられたのは以下であった。

ア 「本人」に起因するもの

- ・自己理解の促進
- ・柔軟に関わる力の育成
- ・不満の解消法の獲得

イ 「環境」に起因するもの

- ・承認欲求の解消
- ・家庭や関係機関との情報共有

これらの結果をふまえて、授業実践1、2を行い、生徒の変容を検証した。

(2) 授業実践1：全校授業研究会

中学部第2学年 生活単元学習「(生徒名)クッキング開店!～手作りお菓子でおもてなし～」

ア 単元設定の理由

授業実践1では、生徒Bの将来の夢である「パティシエ」を発端として、手作りお菓子の店を開き、来客をもてなすまでの学習を行った。生徒は、お菓子を作ったり食べたりすることに興味・関心をもっており、将来はお菓子を作る場所で働きたいという願いをもっている。また、調理実習の経験や、家庭での手伝いを通して得た知識があるため、意欲的に取り組める活動であると考えた。

生徒Bのコミュニケーション面での課題を克服するため、人と関わる上での意味の捉え方を考えたり相手の気持ちを読み取ったりする場面を設定した。また、接客中に注文や相手の要望を確認したり、会話をしたりするなど、様々な状況を想定した。接客の練習や様々な人を接客するプレ開店や本番の開店を通して、色々な意見に触れながら自分の接客の様子を振り返り、対応の仕方について考え、経験を積み重ねることで、日常生活において、様々な状況や場面で柔軟に関わる力が身に付くのではないかと考えた。

イ 具体的な方法と手立て

(ア) 見通しを持って主体的に学習に向かうために・・・【課題対応能力】

- ・お菓子作りから開店までの活動にイメージや見通しをもつことができるように、実際に手作りのお菓子を試食したり店の雰囲気分かる動画や写真を提示したりする。
- ・意欲的に活動に取り組むことができるように、生徒が得意とする絵を描く活動を取り入れ店内の装飾物を作る活動を設定する。
- ・自信をもって活動ができるように、生徒の気付きや工夫が見られた点を即時評価する。
- ・開店までの一連の活動に見通しがもてるように、活動内容やスケジュールを視覚的に提示する。
- ・相手を意識しながら適切な対応を考えられるように、接客時のロールプレイを行う時間を設定する。
- ・学習を振り返り、成果や頑張った点を実感したり、次時の活動の意欲が向上したりするように、振り返りシートを準備し、共有する時間を設ける。

(イ) 自分を認めたり他者との考えを受け入れたりするために・・・【人間関係・社会形成能力】

- ・できていることや自分の良さを実感することができるように、接客の様子を動画で撮影し、良かったポイントを伝え、生徒の良さを認める場面を設定する。
- ・自分と他者の評価を比較し、お互いに認め合うことができるように、客役の教師から接客の様子を「アドバイスシート」に記入してもらい、多様な意見に触れる機会を設定する。

(ウ) 状況に応じたコミュニケーションを図るために・・・【人間関係・社会形成能力】

- ・色々な人や状況で対応できるように、プレ開店や開店時に来てもらう職員に対し、様々な状況を意図的につくってもらえるように依頼する。

ウ 授業実践1の振り返り

接客の際、様々な質問や要望等に対応をする場を意図的に設定したことにより、「～と聞かれたがうまく答えられなかった」「～のときはどうしたらいいのか」というように対応に苦慮した状況を生徒本人が強く体感した(写真2)。また、事後学習では、接客の様子を動画で視聴し、アドバイスシートに記入された改善点の内容と照らし合わせながらその時の状況を振り返るこ

とができた。アドバイスシートの活用は、生徒が様々な人の意見に触れながら思考するためのツールとなり、人とやりとりする力を伸ばす手立てとして有効であったと考える。

アドバイスシートに記された内容を、教師がキーワード化して提示し、情報を整理したことにより、他者の意見を元にしながらかえる活動につながった（写真3）。また、様々な状況を想定してロールプレイを繰り返したことで、生徒の期待感が高まった。アドバイスシートの活用とロールプレイの繰り返しにより、接客時に気を付けるポイントが生徒の中で明確になり、状況に応じた対応がスムーズにできるようになってきた。

今後、高等部進学や卒業後の進路先において、関わる人が変化していくことが予想される。今後の学習でも、様々な立場の人と良好な関わりができるよう、指導を継続していく必要があると考える。



写真2 様々な質問や要望に対応する様子



写真3 キーワード化した改善点をもとに次時の接客に向けて考える様子

(3) 授業実践2：グループ授業研究会

中学部合同 作業学習「秋盲祭での販売に向けて～目標の数を決めて協力して製品を作る～」

ア 単元設定の理由：キャリア教育の視点から検討したこと

授業実践2では、作業学習が今年度から中学部2名での実施になったことを生かし、活動の中に生徒同士が関わる場面を設定したり、製作した製品を校内や校外の人に販売したりする場面を設定した。昨年度は生徒Bが一人で製作してきた紐を織って作る「マルチミニマット」に加え、生徒Aが得意な活動であるビーズ製品を加え、生徒同士が意見を出しながら製品の開発を行う場面を設定した。

イ 具体的な方法と手立て

(ア) 見通しをもって主体的に学習に向かうために・・・【課題対応能力】

- 学習時間の流れと活動の区切りを理解して活動に向かえるように、2時間続きの学習の中に「はじめの会」と「まとめの会」を設定し、時間を固定して行う。
- 作業内容を自分で判断しながら目標を立てられるように前時までの進捗状況を伝え、触って分かる具体物を提示する。
- 時間を有効に使い、集中して取り組めるように、得意な工程や活動を繰り返し、報告する相手や場所を随時工夫する。
- 販売活動に見通しをもてるように、事前にお金の計算や製品説明のロールプレイを行う。

(イ) 自分の役割を理解して他者と協力するために・・・【人間関係・社会形成能力】

- ・働くための基本的な態度を身に付けられるように、作業日誌の中に態度面について振り返る項目を設けたり、良い行動や発言を即時評価して全員で共有したりする。
- ・各製品が多くの人の手によって仕上げられていくことを実感できるように、自分の担当箇所ができた後に報告する。その際、依頼する人と伝え方、順番等を確認する機会を設ける。
- ・販売に向けた準備物や役割を理解することができるように、ワークシート等を活用し、職業・家庭科や生活単元学習と関連させる。

(ウ) 働く意欲を高めるために・・・【キャリアプランニング能力】

- ・自信をもって担当する工程を遂行できるように、得意な作業や好きな素材などを作業に取り入れる。
- ・自分に合った方法を工夫しながら製作できるように、様々な治具や手順を試して対話する機会を適宜設ける。
- ・販売の目的と成果を実感できるように、アンケートを実施して他者の反応に注目したり、売上などの具体的な数字を出して製品の対価（報酬）を共有する場を設けたりする。

(エ) 安全に効率よく作業を行うために・・・【感覚の情報を処理する力】

- ・自分から作業に取り掛かれるように、道具や材料の置き場所を決め、作業スペースまでの動線を確認する。
- ・得意な感覚を生かして作業できるように、テグスや針やテープを付けたり、編み機の背景色を変えたりするなど、手指の感覚や力加減、視覚などに働き掛ける治具を工夫する。
- ・効率よく製作できるように、報告と依頼の方法と相手を決め、一貫した活動（製品作り）と分業制の活動（販売の企画と準備）を組み合わせる構成する。

ウ 授業実践2の振り返り

生徒らは学校行事「秋盲祭」に向けて製作した製品が完売したことにより、大きな達成感を得た。販売に向けて、商品のポップやポスターなど様々な物を準備しながら、これまで製品を作り続けてきたという成果を実感できた（写真4）。また、製品を買った人からの感想を聞いたことで、次の学習への意欲と考えが深まり、「次はこんな製品にしたい」という期待感につながった（写真5）。製品作りでは、担当の工程を終えた後、次の作業内容を自分で選択するなど、主体的な姿勢が見られるようになった。



写真4 販売前に製品を並べながら製品説明のロールプレイをする様子



写真5 生徒同士で役割を分担しながら作った製品を販売する様子

また、生徒と教師の協力体制をルーティン化したことで、「報告」と「依頼」を繰り返しながら関わる状況が生じた（写真6）。製品販売までの過程で「製品が色々な人の手に渡りながら完成していく」という生徒Bのつぶやきから、徐々に「共同する意識」が芽生えてきたことが感じられた。教師が生徒の言動を一つ一つ丁寧に言語化し、相手の声や音に耳を澄ませて感じられる環境を整えていくことが、見えにくい、見えにくい生徒にとっての「共同するための道標になる」ということを教師同士で共通理解できた場面であった。

製品を買ってくれた方からのアンケート結果からは、「次は〇〇のような製品を作りたい。」「〇〇さんはこの作業が得意だと思う」などのアイデアが出され、相手の考えと自分の考えを関係付けながら次の学習の課題を見出すきっかけとなった。

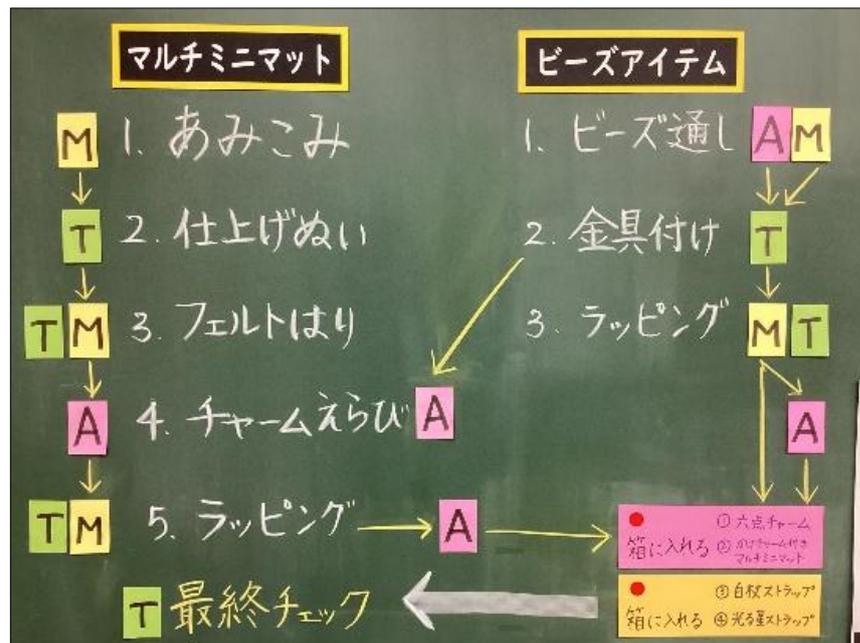


写真6 生徒と教師の協力体制をルーティン化し、作業の流れを図にして黒板に掲示した

5 研究のまとめ

(1) 成果

ア 人と関わる場面の意図的な設定による社会性と対人関係能力の向上

授業を通じて、生徒自身に内面と行動の両面で成長がみられた。様々な環境を受け入れて自分の感じ方を柔軟に変化させる適応力が身に付くとともに、集団への所属意識が高まってきた。特に作業学習や校内実習といった実践的な場面では、相手に対する敬意をもって活動に取り組む姿が見られるようになり、社会性や対人関係能力の向上が確認できた。

イ 定型のやりとりの繰り返しによる活動への意欲付け

授業の中で、生徒や教師と「報告」や「依頼」など、協力体制をルーティン化したことにより、生徒が「できました」「次、～をお願いします」など、相手に話しかける経験を重ねられた。やりとりを繰り返すことにより、学習に見通しをもち、活動への意欲向上につながった。

ウ 指導・支援のアプローチと教師の気付き

インシデントプロセス法などを活用し、生徒を多角的な視点で見取る（アセスメントする）ことにより、これまでにない新たな気付きや発見が得られた。また、生徒の成長を促すためには、単に見守るだけでなく、教師側による意図的な仕掛けづくりや適切な働きかけが重要であることを再認識することができた。

エ 共通理解の深化と教員間の指導連携

職員研修を通じて「キャリア」および「キャリア教育」という共通の視座をもつことで、研究グループとして大切にすべき軸が定まった。この共通理解を基盤として、具体的な指導場面において「誰が・いつ・何をするか」という教員間の役割分担と連携が明確化され、グループ内で意図的に指導体制を整理することができた。

(2) 課題

ア 生徒の状況に応じた支援

生徒が自分の置かれている状況や課題、その時の感情と向き合うことが難しいことがあった。生徒が安心して自己と向き合い、状況を受容したり、感情を前向きに受け取ったりしていけるよう、どのような言葉掛けや環境づくり（手立て）を行えばその姿勢を支えられるのか、生徒の状況に応じた具体的な支援について共通理解する必要がある。

イ 指導における生徒へのアプローチの検証

生徒が緩急をつけて活動に取り組めるよう、場面に応じた「オン（集中・活動）」と「オフ（休息・緩和）」の切り替えを、教師側がより意図的に設定する必要がある。あわせて、座学や言葉での説明だけでなく、生徒が実感を伴って理解できるよう、「体験から学ぶ機会（核になる体験）」を教育課程の中でどのように確保していくかも重要な検討事項である。

ウ 教員同士の連携と指導における役割分担

限られたスケジュールの中で、教員同士が授業についてじっくりと話し合い、検討する時間を十分に確保することが難しかった。授業に対するそれぞれの意見をしっかり吸い上げた上で教員同士が連携し、役割分担していく必要がある。

(3) 次年度に向けて

来年度の中学部は各教科等を合わせた指導を含む教育課程で学ぶ生徒が 3 名となる予定である。学部合同の作業学習や生活単元学習等においては、今年度同様、生徒同士がお互いを尊重し合いながら、一人一人が活躍できる場の設定を継続していきたい。今年度の実践を踏まえながら、引き続き、生徒の「やりとりの力」を伸ばし、生徒自身が人と「かかわる力」を発揮することの楽しさや大切さを実感できるような授業づくりを目指したいと考えている。

Ⅲ 高等部普通科グループの研究

生徒の「知りたい」「やりたい」意欲を起点とした授業作り

1 高等部普通科グループの生徒の実態

本研究グループの対象生徒は、高等部普通科1年1名（以下生徒Aと記載）と、2年1名（以下生徒Bと記載）の計2名で、生徒Aは弱視、生徒Bは全盲である。生徒Aは、各教科等を合わせた教育課程を履修しており、体調に合わせて登校日を調整し、学習活動を精選している。調理活動や制作活動を中心とした生活単元学習や、作業学習における製品製作を好み、意欲的に学習に参加している。生徒Bは、準ずる教育課程のA1（就職コース）に所属しており、教科学習の他、学校設定教科である「職業総合」を履修し、就労や卒業後の社会生活に関わる学習活動や実践的な作業活動等に取り組んでいる。いずれの生徒も本校入学からこれまで1人学級に在籍しており、授業の大半が個別、あるいは少人数の学習形態で実施されている。そのため、同年代の集団の中で発言したり、周りとのペースを合わせて行動したりするような経験が日常的に少ない。

「視覚障害教育における基礎的・汎用的能力の段階表」から捉えた対象生徒の実態は、表1のとおりである。

表1 「視覚障害教育における基礎的・汎用的能力の段階表」から捉えた対象生徒の実態

	生徒A	生徒B
・人間関係・社会形成能力	・健康面からも集団への参加が難しく、身近な人との関わりが中心である。	・学校外の相手とも関わりをもつ機会があり、関わり対象が広がってきている。相手に配慮した言動が定着し、円滑な人間関係を築く力が身に付いている。
・感覚の情報を処理する能力	・パソコンやスマートフォン等の機器を使って自分から情報を収集する技能が高く、目的に応じて適切にアプリを使って作品を製作することができる。	・点字による学習方法が身に付いており、ブレイルメモを使用して学習している。公共交通機関の利用経験を重ね、白杖歩行で移動する範囲を少しずつ広げている。
・自己理解・自己管理能力 ・課題対応能力 ・キャリアプランニング能力	・自分の適性を把握して将来の生活をイメージし、将来の生き方を考えて今取り組むべき課題や目標に向かおうとする姿勢は、まだ確立していない。	・勤労意欲があり、社会の一員として活動に参加し責任を果たそうとする態度が身に付いている。将来の生活設計は漠然としており、今取り組むべき課題に向け、具体的な行動に移せていない状態である。

このような実態を踏まえ、教師間で生徒の健康状態の把握や、その時々的心情の推察をきめ細かく行い、授業や生活に関するエピソードや教師の対応を共有するとともに、社会性を育む経験の場を設け、生徒が主体的に考え参加する力の育成を目指すこととした。生徒一人一人が自分らしい生き方を実現し、社会で自立していくために必要な能力や態度を育ていけるよう、グループで実践にあたった。

2 研究方法

- (1) 資料による高等部段階におけるキャリア教育の共通理解
- (2) コアプロブレムにおける「課題に関連するキーワード」とキャリア教育全体計画の「キャリア発達の課題」との重ね合わせ
- (3) キャリア教育の視点に沿った授業実践

3 授業実践

- (1) 高等部段階におけるキャリア教育の共通理解

「特別支援学校学習指導要領解説総則編（高等部）」によると、「本項（キャリア教育の充実）は、生徒に学校で学ぶことと社会との接続を意識させ、一人一人の社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育み、キャリア発達を促すキャリア教育の充実を図ることを示している。」とされている。それぞれの教科・科目において、学習と現在及び将来の生活を結び付け、生徒が学ぶ意義を理解し、学ぶ意欲を高めることが求められている。

また、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（中教審答申平成23年1月31日）」では、「高等学校（特に普通科）におけるキャリア教育の推進方策」として（1）～（4）の視点が示されている。本研究では、そのうちの3点に重点を置くこととした。

- | |
|---|
| (1) 社会的・職業的に自立するために必要な基盤となる能力や態度を育成する |
| (2) キャリアを積み上げていく上で必要な知識等を、教科・科目等を通じて理解させる |
| (3) 体験的な学習の機会を設ける |

さらに、昨年度までの研究テーマとして取り組んだ「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、研究グループ内で講じてきた手立てを継続しながら、授業実践にあたる。

- (2) コアプロブレムにおける「課題に関連するキーワード」とキャリア教育全体計画の「キャリア発達の課題」との重ね合わせ

コアプロブレムの「課題に関連するキーワード」（写真1）をカード化し、キャリア教育全体計画の「キャリア発達の課題」6項目（写真2）をシート化した台紙に貼りながら分類することで、生徒の実態を分析した（写真3）。

1 課題に関連するキーワード
1 (3) 危険な場面での対処法 (5) 運動量の確保、運動に対する意欲向上、食生活と健康に関する
2 (2) ランドマークを意識した行動、的確な援助依頼 (3) 打ち込めることの発見
4 (3) タブレット型端末の効果的な活用 (4) 周囲の状況把握（ICTの活用）、メンタルマップと状況把握 (5) 的確な概念形成、身に付けた概念の活用、体験や具体物の活
5 (2) 白杖の活用 (4) 基本的な歩行技術、援助依頼する方法、白杖を活用した目的
6 (1) 語彙力 (3) 語彙や文法体系の習得、抽象的な言葉の理解、文意による表

写真1 コアプロブレムの「課題に関連するキーワード」

令和7年度 秋田県立視覚支援学校 キャリア教育 全体
学校教育目標、各学部の目標
におけるキャリア教育の目標 生徒一人一人の視覚障害や発達段階、特性等に応じた教育を行うとともに、社会的・職業的自立 を促すことを通して、キャリア発達を促す。※キャリア発達…社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らし
発達の課題～自立と社会参加のために～
【本校幼児児童生徒のキャリア発達の課題】
1 興味・関心、意欲的な態度の形成
2 的確な概念形成
3 保有する感覚の活用と文字処理
4 歩行能力の向上
5 日常生活動作の習得
6 自己理解と障害受容

写真2 キャリア教育全体計画の「キャリア発達の課題」

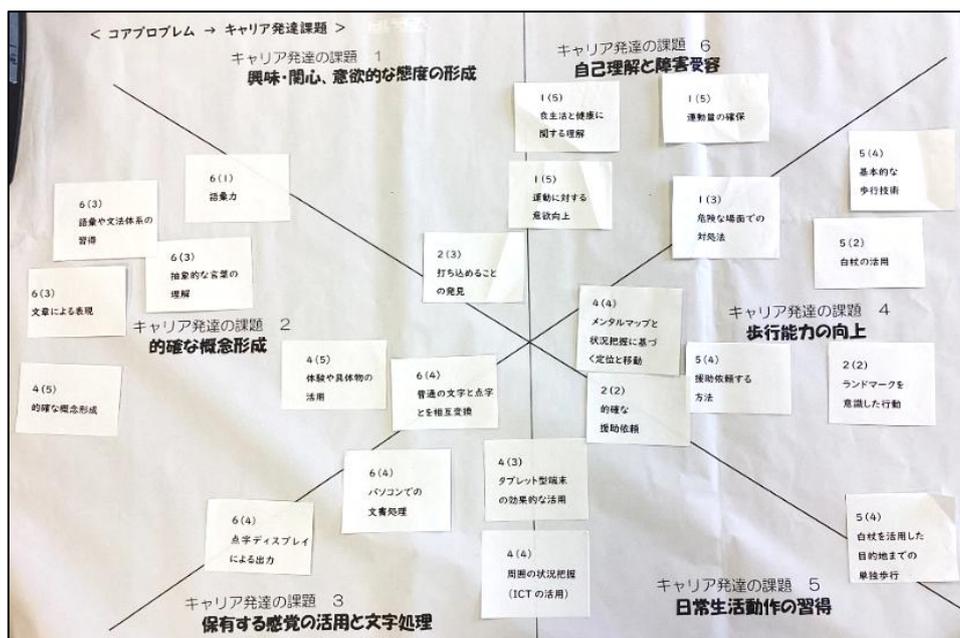


写真3 「課題に関連するキーワード」と「キャリア発達の課題」6項目とを重ね合わせた表

生徒Aは、「キャリア発達の課題1 興味・関心、意欲的な態度の育成」および「キャリア発達の課題6 自己理解と障害受容」のエリアにキーワードが集中した。一方、生徒Bは、「キャリア発達の課題1～6」全体にキーワードが分散していた。これらの結果を踏まえてグループ内で協議したところ、「キャリア発達の課題2～5」の達成を目指して取り組むには、「キャリア発達の課題1 興味・関心、意欲的な態度の育成」が基盤となるのではないか、という見解に至った。

このことから、本グループでは、生徒の「知りたい」「やりたい」という意欲をもって参加できる活動を、授業や単元の中に意図的に設定することとした。また、生徒が活動を通して学び得た知識や技能を実際の生活場面で活用できることや、他教科の内容との関連を実感できるよう、経験から得られた気付きや思いを教師が汲み取り、言語化して生徒にフィードバックしていくことにより、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質や能力を身に付けることができるのではないか、と考えた。

(3) キャリア教育の視点に沿った授業実践1

ア 対象生徒と教科等及び単元名

高等部普通科1年 生徒A

生活単元学習 単元名「将来に向けて①～④（調理、小物制作、鳥の巣箱制作）」

イ 単元設定の理由

Aは体調等の理由から授業への参加に消極的な面が見られる一方で、興味・関心のある事柄については、主体的に調べたり自分の意見を伝えたりすることができる。そこで、Aが「やりたい」と感じる活動をきっかけに期待感をもって参加し、学校が「自分の気持ちを伝えられる場所」になることを目指し、本人の意見を尊重し、傾聴する姿勢で関わることを授業者間で共通理解した。本単元「将来に向けて①～④（調理、小物制作、鳥の巣箱制作）」は、Aが主体的に調べ、選び、決め、必要な事柄やさらによくなる方法を考えるといった一連の活動を通して、様々な職員や児童生徒と関わりながら、自分でやろうと決めた活動をやり遂げることをね

らいとしている。これらの活動を通して、Aが自分の得意・不得意に気づき、それを受け入れるとともに、自分で決めたことをやり遂げて自信をもち、自分の思いや考えを他者に伝えていく力の育成につながると考え、本単元を設定した。

ウ 具体的な方法と手立て

(ア) 自己選択、自己決定の機会の設定

Aの「生活力を高めたい」という願いを確認し、本人が「やりたい」活動を聞き取った上で学習計画を立てた。学習を進める際には、条件や選択肢（テーマ、時間、予算、調理時の約束等）を提示し、教師の意見は「提案」として伝え、最終的な決定はAが行うこととした。単元を通して、自分で決めたことが実現できる活動を継続したことで、Aはレシピを決める期限や調理の準備に意欲的に参加し、期待感をもって活動に臨む姿が見られた。レシピ決定の際には、「ヘルシー」「季節」等の条件を基に、自宅でインターネットを使って調べ、その内容を担任に紹介した。実際に調理する場で、担任と調理の手順を確認しながら使いやすそうな大きさや形状の調理器具を選んで準備した。調理活動では、全ての工程に積極的に関わり、援助依頼をしながら、適切な方法を考えて活動する姿が見られた。振り返りでは、レシピ動画による説明が速く内容を確認しにくかったことから、「レシピを書き出せばよかった」と改善方法に気づき、細かい作業をするときは「両手が使える拡大読書器を使いたい」とよりよい方法を考えることができた。また、授業以外の場面で、体調不良時に希望する対処方法や、次にやりたいことを担任に自分から伝えられるようになってきた。

(イ) 実施時期の工夫

長期休業明けやイベントに合わせて単元を設定したことで、Aのモチベーション向上につながった。また、短期的な目標になるように、定期的に単元を設定して実施したことも効果的であった。

(ウ) 他者との関わりの場面を設定

調理の試食や制作活動を通して、Aが様々な教師と関わる機会を設定した。担任は、Aが他の教師とやりとりする場面において、教師に掛ける言葉を例示したり言葉を補足したりして関わりを支援した。Aは、調理品の試食を勧めたり、制作物を見てもらったりする中で、「家族に食べさせたい」という気持ちをもち、教師から「おいしい」「ありがとう」「すごいね」等の言葉を受け、自分の活動が認められたことで喜びを感じている様子が見られた。

(4) キャリア教育の視点に沿った授業実践2

ア 対象生徒と教科等及び単元名

高等部普通科2年 生徒B

職業総合（基礎） 単元名「香り袋の原価を調べよう」

イ 単元設定の理由

「数学Ⅰ 2次関数」の授業で、発展的な課題として「課題学習 2次関数を利用した利益の予測」を扱った。これは教科書の巻末に掲載されている課題であり、現実の問題をモデル化（抽象化）して2次関数の知識を活用して解決することを目的とした学習である。

S高校のあるクラスでは、文化祭で焼きそばを販売し、その利益を寄付する企画を考えている。調査したところ、鉄板などのレンタル費用が5000円、その他の費用は容器代や原材料費などを合わせて、焼きそば1個あたり60円であることが分かった。

(1) 売上額を $f(x)$ とおくと、 $f(x)$ は x の2次関数である。 $f(x)$ を x の式で表してみよう。

(2) 売上額が最大となるときの焼きそば1個の価格を求めてみよう。

この課題を学習するにあたり、Bは休日に家族と参加したイベントの屋台で買い物をした経験を連想し、興味をもって題意を捉えることができた。

また、教科書に示されている表2から「1個の価格を安くすると、販売数が多くなる(たくさん売らないといけない)」ことに気付き、価格設定に関心を示した。さらに、この課題学習のモデルと職業総合

(実践)における販売活動とを結び付け、自分が製作・販売している香り袋の原価を知りたいと考えるようになった。そこで、香り袋の原価を調べる単元を設定し、生徒が材料を計測したり計算したりして、香り袋1個当たりの原価を求める体験活動を取り入れた単元を計画した。

ウ 具体的な方法と手立て

(ア) 体験的な学習の設定

店舗で一般に販売されている布の形状が分かるよう、香り袋のパーツ用に裁断する前の布に触れる場面を設けた。香り袋の製作時、Bが手に取っている布は、香り袋1個分に裁断された状態のものであったため、Bは「こんなふうになっていたんですね。」と、裁断前の布の大きさに驚いた様子を見せた。「1枚の布から香り袋のパーツを何個切り取ることができるか」という発問に対し、Bは布を折りたたみ、型紙の大きさに近づけようと試行する姿が見られた。操作活動によって、1枚の布から香り袋のパーツが何個分切り取れるかを把握し、パーツの値段を求める式を立てて計算して求めた。これら一連の活動は、Bが高い意欲をもって解決に取り組むことができた課題であった。また、普段は自分の工程に特化して製作に取り組んでいるBにとって、他の工程がどのように進められているかを知る機会となり、製作工程全体を把握するきっかけにもなった。

(イ) 同様の製品との比較からの考察

他校の作業班で製作・販売されている香り袋を購入し、価格を確認するとともに、製作方法やラベンダー花粒の容量を調べた。Bは自分が製作している香り袋との違いを比較する中で、それぞれの長所に気付くことができた。同様の香り袋であっても、袋に付属されているシールやタグには付加価値があり、その値段を知ることによって、適正な販売価格を考えることができた。当初は「高すぎるかな。買ってもらえるかな。」と販売価格を心配していたが、自分で求めた原価という確かな根拠を基に、価格が適正であることを納得し、自信をもって商品を販売した。

(ウ) 物価への関心の喚起

本単元を通して、Bは物価の仕組みに関心をもち、販売価格には原材料費の他、輸送費や人件費等が含まれていることを理解した。また、具体例をあげながら販売価格の違いの理由を問い掛けることで、店舗の立地や営業形態等の条件によっても販売価格が異なることを実

表2 新編数学I p294
「焼きそばを販売した際の価格と販売数」

焼きそば1個の価格(円)	販売数(個)
250	203
200	301
150	397

感じた。自分が商品を購入する場合、モバイルオーダーやネットスーパーといった選択肢もあることを考慮するようになった。現在は買い物の際に家族等の介助者の同行が欠かせない状況ではあるが、卒業後の生活を見据え、自分で商品の情報を得て選択したり、自分の都合に合わせて購入したりできるよう、今後も様々な買い物の方法を試し、経験を広げていきたい。

4 研究のまとめ

(1) 成果

ア 生徒一人一人のコアプロブレムとキャリア発達課題のすり合わせ

生徒一人一人のコアプロブレムにおける「課題に関連するキーワード」を、キャリア教育全体計画の「キャリア発達の課題1～6」と重ね合わせることで、キャリアの視点から生徒それぞれの実態を捉えることができた。また、キャリアの視点に沿った授業作りを進める上で、研究グループ内で共通の方向性を定めることができた。

イ 生徒が「知りたい」「やりたい」意欲をもって取り組める体験活動を軸にした単元の設定

生徒の「知りたい」「やりたい」という気持ちに即した体験活動や課題を基に単元を設定したことで、生徒が主体的に調べたり試行したりする姿が見られ、生徒主体の授業が展開された。生徒は、自分で選択・決定した方法を試し、達成感を得たり、思うようにいかなかった経験から改善策を考えたりした。こうした過程を通して、自分がやりたいことを実現するために、自分に合った方法を探し調整することや、必要に応じて援助を求めることを知り、自己理解を深める一助となった。

ウ 他者との関わりの場面の設定

単元計画の中で、生徒Aが生活単元学習において、自分制作した巣箱を他者に提示したり、生徒Bの職業総合(実践)や生徒Aの作業学習において、製作した製品を販売したりする場面を設けた。その結果、生徒Aは相手からの称賛や感謝、評価を受け、自分の努力や製作物のよさが認められたことを実感し、自信につながった。他者とのやりとりを通して、相手の役に立ったという自己有用感や、共同体の一員としての意識が高まりつつある。今後も、自分らしさを発揮しながら自己肯定感を高め、社会参加への意欲を育てていきたい。

エ 学んだことと実生活とのつながりを感じられる課題の設定

各教科・科目で学んだ内容が実生活でも結び付いていることを実感できる課題を設定することで、生徒の学ぼうとする意欲が高まり、学ぶ意義を感じることもできた。今後も、授業内容が実生活で活用されている場面を取り上げ、生徒が自分の生活に置き換えて思考する機会を設定していきたい。

(2) 課題

ア キャリア教育全体計画の「キャリア発達課題1～6」の関連性の整理

研究グループ内で、コアプロブレムにおける「課題に関連するキーワード」とキャリア教育全体計画の「キャリア発達の課題」とを重ね合わせた際、「キャリア発達の課題1～6」を明確な意図を持たせずに6分割して台紙に配置した。しかし、キーワードを並べていくうち、「キャリア発達の課題1～6」には相互の関連性や連続性があることが明らかになった。次回以降の実施把握では、これらの関連性を整理した上で、配置や手法を工夫する必要がある。

イ キャリアの視点からの授業実践の評価

キャリアの視点を取り入れて授業実践を行ったが、活動後の生徒の意識や行動の変容には、授業における手立てだけでなく、生徒自身の生活リズムの変化や、関係者からの関わり等、複数の要因が影響していると考えられる。そのため、生徒の変容に対して授業の手立てがどの程度有効であったかについては、十分に検証しきれていないという課題が残った。

(3) 次年度に向けて

ア キャリア教育の評価

生徒の変容を捉えるためには、多角的な視点からの分析が必要である。生徒の実態に関する情報を整理するとともに、各授業において生徒の目指す姿や期待する言動を明確に設定した上で、実践と評価を行っていききたい。

イ キャリア教育の実践の場の拡大

今年度は主に授業場면을キャリア教育の実践の場としたが、学校外の活動においても、生活経験を基に自分の行動を判断したり、他校の生徒との関わりを通して自己理解が深まったりする場面が見られた。今後は、キャリア教育の実践の場を授業に限定せず、様々な活動場面から生徒の願いや言動を捉え、キャリア発達を促していききたい。

IV 高等部保健理療科・生活情報科グループの研究

理療科への進学を目指す生徒の生活情報科での取組

1 はじめに

生活情報科は、一人一人の見え方やニーズに応じた様々な学習に取り組み、QOL を高めるとともに、自主的な社会参加へとつなげる学科である。修了生は、ここで学んだことを生かして、家庭生活や余暇を充実させたり、再就職や進学に向かったりしている。また、生活情報科に在学中、理療科及び保健理療科（※以下「保理科」と記す）に興味をもち、進学する修了生も多い。

昨年度在籍していた生徒Aは生活情報科での1年を経て、高等部保健理療科（※以下「高保理科」と記す）に入学した。現在は、あん摩マッサージ指圧師の国家資格取得に向け学習に取り組んでいる。今年度生活情報科に在籍している生徒Bは理療科への進学希望をもって入学してきた。また、本研究グループでは、生活情報科における取組の一つとして、理療科及び保理科への進学を希望する生徒に対する支援について、一つのモデルケースを作成したいと考えた。3年計画の一年目の研究である今年度は、主に理療科及び保理科進学を目指している生徒の生活情報科での学習についての取組事例を報告する。

2 生徒の実態及び取組等について

(1) 生徒Aについて

生徒Aは、30代の男性で見え方は右が手動弁、左が光覚である。白杖歩行や音声パソコンなどの日常生活に必要なスキルを習得するために令和6年度に生活情報科に入学した。入学当初から生活情報科の修了後に、高保理科への進学を希望していたため、パソコンを活用した学習スキルの習得や基礎学力の向上に取り組んだ。

生活情報科では、日常生活における様々な技能取得と歩行技術の向上を目指すとともに、高保理科での学習に必要なスキルの習得を目指した。現在は、高保理科で、PC トーカーを活用しながら学習に取り組み、国家資格取得を目指している。真面目な性格で学習意欲も高く、分からないことは積極的に質問をし、授業の中で要点にマーキングするなどの工夫もみられる。

(2) 生徒Bについて

生徒Bは、50代の男性で見え方は右が0.07(0.7)、左が手動弁である。糖尿病による視力低下のため、教育相談を経て、今年度、生活情報科に入学した。はり師の資格の取得を目標とし理療科への進学を希望し、その準備段階として生活情報科で学ぶこととした。様々なことに興味をもち、一般的な知識や話題も豊富である。

生活情報科では、見えにくくなったことからくる困難さに対して、安心・安全な生活を目指してより有効な方法を見付けること、また、本校理療科入学に向けて学習するための基礎としてパソコンスキル等の向上を目指して、各担当と連携して学習を進めてきた。理療科進学に向けては、本人より見えにくさからくる学習への取り組み方の不安が挙げられた。そこで、理療科と連携を図り、学習内容や卒業後の就労状況等についてより詳しく正確な情報を提供し、実態に合った学科の選択（進学先選択）ができるように支援した。

3 研究方法

- (1) 生徒の実態把握と課題の抽出
- (2) 進学に向けた取組の計画立案と実践
- (3) 生徒の変容と課題の整理

4 理療科及び保理科への進学に向けた取組の記録

(1) 生徒 A の昨年度の取組及び今年度の様子

ア 理療科の授業見学

1 回の授業の学習量や授業の流れ、学習方法など進学後の学習のイメージをもつことができた。

イ 学習方法の確立

PC トーカーを活用したパソコン操作の習得により、テキストデータ主体の授業スタイルが確立した。テキストデータへの重要事項のメモやマーク、検索機能を活用した振り返りなど、授業内のみならず自主学習においても不可欠なスキルを身に付けた。

ウ 点字の学習

点字の触読及びパーキンスブリーダーによる入力方法の習得に取り組んだ。高保理科への入学後、定期テストでは国家試験の点字解答形式の試験にも対応できるよう、毎日打ち込みに取り組んでいる。

エ 歩行技術と単独歩行

基本的な白杖歩行に加え、秋田駅改札からスクールバス乗降場所までのルートを反復練習した。その結果、公共交通機関を利用した自力での登下校が可能となり、帰省時に歯科通院をしたり、友人との食事の機会を設けたりするなど移動や時間に対する柔軟性が大きく向上した。

オ 自己管理能力の育成

歯科治療を計画的に継続し、昨年度から今年度にかけて完遂した。健康管理の重要性を理解し、学業と両立させながら定期的に受診する習慣が定着した。

(2) 生徒 B の取組及び様子

生徒 B の実態や面談での進路希望や不安の訴えなどから、生徒 B の目指す姿を「自分で納得して進路を選択する（あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師のうち、どの資格の取得を目指した学科とするか）」として以下の学習活動を設定し、実施した。また、生徒 B の生活情報科での取組は、生活する力としてだけでなく理療科への進学するためのベースとなるものとして、学習活動全般で取り入れた。

実施日	内容
5月	①理療科主任より理療科についての説明 ・理療科と保理科の違い、国家試験や資格取得に関すること、学習量について、求められる点字のレベル、学習方法についてなど
6月	②理療科の授業見学

11月	③模擬授業の実施・・・4(3)に記載 ④学部主事との教育相談 ⑤理療科と保理科の違いの提示 ・教育課程の比較、国家試験の内容と問題数の比較など
12月	⑥臨床体験発表会への参加(理療科行事)
1月	⑦職場見学(治療院見学)

取組に当たっては、以下の4点に留意し指導を行った。

- ア 定期的な個別面談による進路希望の確認と生活での困難、不安等の聞き取り
- イ 現状を考えた進路選択のための正確な情報の提供
- ウ Pの会、CAの会、自立活動検討会、本研究による職員間の共通理解
- エ 生徒Bの現状に応じた学習方法を確立するための具体的な学習内容の相談と授業担当者間での分担(情報、点字など)



パソコンを使ってフォルダ整理をする様子



治療院の見学で、治療台を触って確かめる様子

(3) 授業実践：理療科を想定したロールプレイ

ア 対象生徒と教科等及び題材名

高等部専攻科生活情報科 生徒B 単元名 臨床医学各論(生活と疾患)「糖尿病」

イ 授業のねらい

(ア) 理療科の授業に見通しをもつ。

生徒Bはこれまでに、理療科や保理科の複数の授業を見学するなど数回授業に参加している。授業を通して雰囲気は感じとっていたものの、まだ理療に関する専門的な知識に触れたことがないため、生徒Bには学習内容に関する難易度は伝わっていないようであった。そこで、進学後の授業に見通しがもてるように模擬授業体験を計画し、学習内容がより伝わるよう生徒Bのもつ原疾患を基に単元を設定した。主体的に授業に参加できるよう配慮した。

(イ) 習得した学習方法を活用する。

理療科及び保理科で学習していく上での大きな課題は学習方法の確立である。これま

で、習得してきたテキストデータを利用した音声データの活用、PC トーカーでの音声の活用等のスキルを、実際の授業の中でどのくらい活用できるかを把握した。

ウ 成果

生徒Bは、あらかじめ週末に教科書データを聞いたり、前時に用意した資料のテキストデータを音声で聞き取ったりして予習を踏まえた上で、授業に臨んだ。授業後に生徒B、授業者、担任で授業の振り返りを行ったところ生徒Bからは授業を通して、「内容を聞き取るのが精一杯だった」「専門用語が多く、分かっているのか、いないのかも分からなかった」「どんな漢字かも分からなかった」「今回は自分の疾患で分かりやすい内容だったが、別の授業だと不安だ」など感じたことを多数挙げた。ただ漠然と理療科での勉強は大変だろうと思うだけでなく、実際に授業体験し自分に必要なことや大変さを感じたことは大きな成果だった。また、授業後の宿題への取組を含め、予習や復習の大切さを感じる体験となった。

エ 課題・改善策等

本時は、PC トーカーやテキストデータの使用など、身に付けたことを授業の中で活用することに重点を置いたため、要点をメモに取るという場面を設定しなかった。理療科や保理科への進学を見据えた場合には、素早くメモを取るスキルの習得が必要不可欠となり、経験を積み重ねていく必要がある。今後もメモを取ることの重要性を話題にしたり、機会を設けたりして、課題意識を高めていきたい。機器操作については、操作の仕方は覚えてきたが、実際の授業で活用するにはまだまだ課題がある。一人で素早く行うことを目標として今後も取り組んでいく必要がある。

「何か質問はありますか？」という発問に対して生徒Bは、状況に関係なく何を聞いてもよいという捉え方をしている様子がみられ、内容が大きく逸脱したり、大幅に時間を要したりすることがあった。思考を促す目的での発問であったが、「再確認したいことはありますか？」など生徒に合わせた発問の仕方を考えるよう職員間で共通理解する必要がある。

5 研究のまとめ

(1) 成果と課題

授業実践を通して、学習面での焦り・不安から体の部位や経穴など用語・語句を早く覚えたいという思いが強くなり、焦りや不安な様子がみられた。関係する職員で現状を共通理解・連携し、まずは学習方法（メモの取り方、用語の調べ方など）を身に付けることが大切であると様々な場面で必要性を伝えることで、覚えるべきことを理解し取り組むことができた。

入学当初の面談での進路希望は、「理療科へ進学し、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師の3つの資格を取得し、卒業後すぐに開業する」と考えていた。希望に向けて進むことは悪いことではないが、進路先の正確な情報を得て判断することも大切である。模擬授業体験、専門的な立場の職員の話、各学科の教育課程の比較など、時間を掛け、正確な情報を得たことで、「進学先（学科）は理療科のままでよいのか」「やっていけるのか」「理想をあきらめてよいのか」と考えが揺れ動き、非常に悩み、悩んだ上で現実を踏まえて希望や思いを考えるようになった。最終的には本人の判断で「あん摩マッサージ指圧師の資格取得を目指す保理科へ進学し、卒業後は訪問マッサージ等へ就職し経験を積み、60

歳までに開業したい」という希望となった。悩みながらも生徒Bが納得して進学先を決めることができたことは、目指す姿を達成できたと感じている。

今年度の研究では、理療科及び保理科進学を目指して生活情報科に入学する生徒への取組の参考となるモデルケースの作成を行ってきた。今後、同様の希望をもつ生徒が入学した際の指導・支援の柱とすることで、よりスムーズで系統的な指導と支援につながるよう継続して取組事例を積み重ねていきたい。

(2) 次年度に向けて

模擬授業の実施時期・内容については、生徒の進路希望によるところが大きいですが、進学の意味が強い場合は、授業のイメージをもつことや学習方法の確立に向けた課題の気付きに大変有効であったので、9月上旬の実施がよいと思われる。また、現実と希望に開きがある場合は11月中旬に2回目を行い、進路先決断の材料にしていきたい。

生活情報科から理療科あるいは保理科への進学を考えている生徒のPの会やCAの会、自立活動検討会などの話合いの場では、担任とともに理療科職員や学習の柱となる情報の担当職員がメンバーとして参加することが望ましい。この場で生活や進学に向けた支援学習内容や学習方法の確立を検討、共有することで、入学後の効率的な学習につながるのではないだろうか。

V 理療科グループの研究

生徒一人一人の課題に応じた取組

1 はじめに

現在、高等部専攻科の理療科には専攻科保健理療科2年1名、3年1名、専攻科理療科1年1名、2年1名の計4名の生徒が在籍している。いずれの生徒も、将来、あん摩・マッサージ・指圧師、はり師、きゅう師（以下、あはきと称する）の国家資格を取得し、自立と社会参加を目標に、意欲的に勉学に励んでいる。

しかしその一方で、毎年実施している学校生活に関する意識調査の結果では、自己有用感の項目（「自分自身に満足している」「自分には長所があると感じている」「自分のことを褒めてあげたいと思うときがある」「前向きに考えることができる」）に対して、否定的な回答を示す生徒が多い。自己評価を低めに抑えている可能性もあるが、本来「あはき」は、視覚障害においてその特性ともいえる触察力を活用することができるうえ、更に患者に感謝される魅力ある有益な職業である。それにもかかわらず、「自分に何ができるか」「どうしたら人の役に立てるか」と悩み、他人と過剰に比較しては心を疲弊させ、自己肯定感を低下させてしまうのが生徒の現状である。

そのような現状を打ち砕くために、我々教員は生徒にあはきの国家資格を取得することを支援することで、「視覚障害のある自分にこんなことができる」「社会に貢献できる」という自己有用感をいろいろな場面で育むことができるのではないだろうか。

そして、今年度の全校研究主題である「視覚に障害のある幼児・児童・生徒の自立と社会参加に向けた指導・支援の充実（※キャリア教育全体計画）を活用した授業づくりと生活指導を通して」を遂行し実現化することが我々教員の責務であると考える。

[キャリア教育全体計画における理療分野の目標]

(1) 課題対応能力

三療の基礎的・基本的知識と技術を習得するために、様々な課題を解決するスキルを身に付ける。

(2) 人間関係・社会形成能力

理療の本質と社会的な意義を理解し、患者のニーズに応えるために、知識及び治療技術の向上を追求する。

(3) キャリアプランニング能力

自分の施術技術や態度を振り返り、課題を見つけ改善していこうとする。

2 研究方法

全校研究は3年計画であり、今年度はその1年目に当たる。そこで、全校研究主題を踏まえて、まずは理療科研究グループ（理療科所属10人）で3年間を見通して、初年度に何を研究するべきかを協議し、理療科グループの研究テーマを設定した。そこでテーマを「生徒一人一人の課題に応じた取組」とし、生徒があはきの学習を基盤として、学校修了後に自立・社会参加できるためにはどうすればよいかを話し合った。

いずれにしても、自立と社会参加を目指す現状の生徒にとって最大の命題は、あはきの国家資格の取得である。この命題を具現化するためには、学生生活の3年間をどのようにして計画的に有意

義に過ごすかということが非常に重要になってくる。従って、それぞれの生徒における1年目、2年目、3年目の実態をPの会・コアプロブレム等から把握し、キャリア教育の視点から課題を明らかにすることにした。その上で、その課題を払拭するためには、学校生活で、何が必要か、何を克服するべきか、課題を解決するための取組を考察し、さらに課題解決のために考察した取組を、理療科の教員全体が、月ごとの研究日に評価し、改善を繰り返し加えて行き、実践することとした。以下、(1)～(5)の手順で行い、(2)～(5)を一人一人の生徒毎に毎月の研究日に繰り返し検討を継続し研究した。

- (1) Pの会・コアプロブレム等に基づいた一人一人の生徒の実態把握
- (2) キャリア教育の視点からの課題の提示
- (3) 課題解決のための取組実践
- (4) 課題解決のための取組の評価
- (5) 課題解決のための取組の改善

3 研究計画

実施月	内容
4月	全校研究主題の共通理解
5月	グループにおける副題の決定 Pの会・コアプロブレム等に基づいた生徒の実態把握
6月	生徒一人一人の課題の設定
7月～8月	キャリア教育の視点をふまえた生徒一人一人の課題解決のための取組の検討
9月～11月	課題解決のための取組の実践、評価、改善の協議
12月	グループ研究の成果と課題についてのまとめ
1月～2月	研究報告書「あゆみ」についての検討・報告
3月	来年度の取組についての協議

4 各生徒の実態と課題解決に対する取組

(1) 生徒A

ア クラス、性別、年齢、学習媒体

専攻科保健理療科2年、男性、50代、墨字（拡大読書器使用）

イ 見え方及び眼疾患等

遠距離視力：右 0.02 (0.1) 左 0.02 (0.05) 両眼 0.03 (0.15)

黄斑ジストロフィー、中心暗点、羞明（遮光眼鏡使用）

ウ 生活及び学習の状況

眼疾患の診断を受けてから日が浅く、現在は障害理解や受容の過程にある段階と考えられる。不便さや困難さを感じやすく、その思いを言葉にする場面が見られる。教室環境については、まぶしさへの配慮として遮光カーテンを使用しており、全体的に暗めの照度となっている。拡大読書器は教室および家庭で活用しており、白黒反転で一文字を約2センチ程度の大きさに設定して学習に取り組んでいる。学習面では意欲の波が大きく、自己中心的な面が目立つ。授業の始まりや終わりの挨拶については、その時々状態によって対応にばらつき

があり、安定しにくい傾向がある。

エ 課題

コミュニケーション能力

オ 課題解決に向けた取組

理療師の心得を様々な場面で活用し、日常的に挨拶を促す。

カ 実践の様子及び変容等

(9月) 担任の指導により、授業前後に起立して挨拶をする姿が見られるようになってきた。一方で、合同授業などでは、その時の気分によって挨拶を行ったり行わなかったりする様子も見受けられた。日常的に、他の児童生徒や教職員と協調的に挨拶できるようになることが課題であり、担任及び科目担当教員が継続して挨拶の指導を心がけることとした。

(10月) 授業前後の挨拶は概ね行えるようになってきたが、言葉遣いが粗く、自分の意向を優先するような場面が引き続き見られた。担任を中心に、教員間で反応の有無に関わらず、本人を受け止める姿勢を大切にしながら、挨拶や言葉かけを継続して行っていくことを共通理解した。

(11月) 朝のショートホームルームの挨拶をはじめ、授業前後の挨拶については定着してきている。また、12月からの臨床実習開始を見据え、模擬患者を対象とした施術練習も取り入れた。その中で、施術の技術だけでなく、最初の挨拶や言葉掛けが患者とのラポール(信頼関係)形成の第一歩であることを意識させながら指導を行った。一方で、気分や体調、場面や相手によっては反応がない場合も多い。挨拶が円滑なコミュニケーションに繋がり、これが臨床の場での信頼獲得につながるものであることを踏まえ、担任および理療科全教員が、粘り強く指導を継続していくことを改めて確認した。

(2) 生徒B

ア クラス、性別、年齢、学習媒体

専攻科保健理療科3年、女性、50代、音声パソコン

イ 見え方及び眼疾患等

遠距離視力：右 手動弁 左 手動弁

両眼網膜色素変性症、周辺視野のみ残存、羞明

ウ 生活及び学習の状況

授業は音声パソコンでの学習が中心である。そのため、資料等は、USBを使ってテキストファイルで提示している。国家試験は、DAISYを併用し、パーキンスを使った点字解答による受験スタイルを予定している。学習意欲は感じられるが、習得すべき知識や技術が膨大であるため、時間の経過とともに要点を忘れてしまう傾向にある。全体的な学習量を確保するため、より一層の家庭での自学を促している。日々の学習では、既習科目の知識を振り返り、繰り返し取り組むことで、試験の正答率を引き上げていく必要がある。

エ 課題

各科目の要点整理

オ 課題解決に向けた取組

国家試験合格のために、効率的な演習問題を担当教員が繰り返し出題し点数の底上げを図る。

カ 実践の様子及び変容等

(9月) 国家試験合格を目指し、臨床医学と東洋医学臨床論の問題を中心に、知識を積み重ねようと学習に励んでいる。自分自身に自信を見いだせず、「自分にはできない」と思い込むような自己暗示をかける傾向がある。数多くの問題を反復して、前向きに目標に向かうことができるように心理面にも配慮した。

(10月) 過去の実力テストの科目別成績を分析して、問題数が多く効率的に点数を上げることができる科目として、臨床医学と東洋医学臨床論を選定し、周辺知識と併せながら集中的に学習できる場を設定した。同科目について、抜き打ち的に試験を実施したが、33問中27問の正解であった。学習の成果が数字となって現れることで、自信も徐々に見られるようになった。学習内容の理解度を見極めながら、現状の指導を継続する。

(11月) 各教員の粘り強い指導の支援によって、質問に対して適切に回答できる場面が多くなってきた。問題の難易度に差があったにせよ、7月に実施した第1回目の実力試験の正答率が59%だったのに対して、11月の結果は71%と大幅に伸びた。また、11月の試験結果にも満足せず、「勘違いをしてしまった。悔しい。」という言葉が聞かれた。苦手な科目や単元に少しずつ自信を持つことができるようになり、その影響が他の基礎科目の点数アップにも反映したものと思われる。今後も、モチベーションを保ちつつ、現況の指導を継続して行くことを確認した。

(3) 生徒C

ア クラス、性別、年齢、学習媒体

専攻科理療科1年、男性、40代、墨字

イ 見え方及び眼疾患等

遠距離視力：右 0.02(0.4) 左 0.02(0.7) 両眼 0.04(0.5)

網膜色素変性症、視野狭窄

ウ 生活及び学習の状況

全ての科目に対して、積極的に取り組もうとする姿勢が伺われる。教科書はUDブラウザ版と活字版を使用している。ただし、ゴシック体や教科書体に比べ、明朝体は読みにくさを訴えている。文字のフォントは、ゴシック体か教科書体で、サイズは12ポイント以上のものが望ましいようである。今後、社会学で、LEDライトの使用や白杖歩行体験、遮光眼鏡体験などを行う予定である。今まで、視覚中心の生活だったので、視覚以外の感覚の活用を意識することを配慮する。

エ 課題

保有感覚（残存視機能及び触覚等）の積極的な活用

オ 課題解決に向けた取組

現在は視覚に頼ることが多いが、進行性の疾患であることを踏まえ、将来的な視機能低下を見据えた指導を行う。図や模型を「見て、触れる」活動を通し、保有感覚を活用して対象の全体像を捉える習慣が身に付くよう促す。

カ 実践の様子及び変容等

(9月) 視覚に頼る点が多く、模型などに主体的に触る場面が少ない状況にある。本質的に必要以外の物に触りたがらない性格のようである。また指導の中で、短期記憶は良いが、長期記憶になると知識が抜け落ちやすいという実態が目立つようになってきた。まずは保有感覚の活用を促しつつ、それを知識の定着にどう結びつけるかも視野に入れて指導する。

(10月) 今まで、視覚中心で学習してきたので、やはり現状は視覚に頼る点が多いようである。今まで以上に触覚やその他の感覚を活用できる指導を心がける。

(11月) 授業の場面で、実際に模型などの触り方を指導することで、より知識が具体化できたようである。時々基準点を忘れてしまうことがあるので繰り返し指導することが大切である。今後も残された視力を活用しながら、他の感覚も働かせて知識の定着を図っていくことを確認する。

(4) 生徒D

ア クラス、性別、年齢、学習媒体

専攻科理療科2年、男性、50代、音声パソコン

イ 見え方及び眼疾患等

遠距離視力：右 0.02 左 0.08 両眼 0.06

緑内障、視野欠損

ウ 生活及び学習の状況

音声パソコンでの学習が中心である。そのため、授業の資料等は、USBを使って、テキストファイルで提示している。MyFileでのファイル管理やMyEditの活用が1年生の時より速くなってきている。国家試験は、音声受験、パーキンスによる点字解答で受ける予定である。授業中に呆然となったり、眠そうにしていたりすることも多い。体力面でやや心配な点があり、実技を始め、積極的に体を動かす活動に取り組む必要がある。

エ 課題

学習方法の確立と体力の増進

オ 課題解決に向けた取組

肯定的な対話と態度で接することによって、被認知能力を高め、それを学習意欲と体力作りのモチベーションにつなげる。

カ 実践の様子及び変容等

(9月) ネガティブな意識が強く、学習方法は確立していない。課題解決のためにも、自尊心をくすぐるような、教員側からの賞賛の言葉掛けが必要である。また、効率的に時間を使うような工夫や隙間時間を活用するように働きかける。

(10月) 自分でも頭では理解しているものの、時間を効率的に使って学習する方法が身につかない様子である。努力の跡は感じられるが、結果に結びついていないように思われる。もう少し、見守りながらアドバイスを続けて行くことを確認する。

(11月) ネガティブワードの発言が少なくなっている。自分なりに、隙間時間を利用するなど、学習時間の確保に工夫が見られるようになってきた。体力面でも、腹筋運動やスクワットを実践したり、夕食後に体育館でウォーキングをしたりして、自らの体力の増強に努めている。

5 研究のまとめ

(1) 生徒A

ア 成果

授業前後の挨拶は一通りできるようになってきたが、相手を思いやるようなコミュニケーションが十分できない状況にある。臨床前評価で一定以上のレベルに達したので、12月から

は、実際に臨床実習の授業で外来患者を施術している。患者とのコミュニケーションやラポールが、いかに重要であるかを肌で感じ取る良い機会になってくれたらと考えている。

イ 課題

コミュニケーション能力には、今もなお、問題は残るが、来年度は最終学年であるため、国家試験合格を見据えた取組が必要である。基礎学力はあるので、今後、学習意欲をどのように喚起し、成績向上に繋げるかが最大の課題である。

(2) 生徒B

ア 成果

定期試験や実力試験などの点数が伸びるに従って、学習に向かう姿勢が意欲的になってきた。また、成績が高まることにより、臨床実習での患者に対する治療技術の向上を追求する姿勢もより一層、感じられるようになってきた。

イ 課題

就職先で、患者と向き合い、日々自分の施術技術や態度を振り返り、課題を見だし、改善していくことが求められる。

(3) 生徒C

ア 成果

視力のみだけでなく、特に触覚を活用しながら学習に取り組む様子が見られるようになってきた。それと共に深い理解や考察につながる場面が見られるようになってきている。実技面でも硬結や反応点を探るスキルが向上している。

イ 課題

今年度の成果を活かして、短期記憶や長期記憶をとどめるためにも、視覚だけに頼らず、今後も、その他の固有感覚を活用しながらの学習が望ましいと思われる。

(4) 生徒D

ア 成果

徐々ではあるが、自分なりに自覚を持ち、学習や体力作りに取り組むようになってきた。学習の成績には十分に反映していないが、全てのことに積極的に取り組む姿が見られるようになってきた。

イ 課題

いろいろな取組が学習活動の確立と体力増進に結びついているので、最終学年として、国家資格をいかにして取得するかが、今後1年間の課題である。

6 次年度に向けて

今年度は、生徒一人一人の課題を明らかにし、その解決のための取組を遂行した。来年度は全校研究の2年目に当たる。それぞれの生徒にとっても大事な1年である。理療科にとって、生徒に自立と社会参加を見据えた国家資格の取得を実現させるためには、今後の研究実践において、より効果的な創意工夫が必要になってくると思われる。たとえば、生徒が学習過程で積み重ねたレポート、学習活動の写真などを、ファイルに入れて保存する評価方法、つまり、評価するために収集された資料による、ポートフォリオの作成を取り入れたい。

これからは、実践を深化させ、このポートフォリオを導入することも、次年度の研究につながる重要なポイントになるのではないだろうか。

VI 寄宿舍グループの研究

生徒の実態に応じた生活指導の実践

1 寄宿舍グループの生徒の実態

寄宿舍には高等部普通科1名、高等部保健医療科1名、高等部専攻科医療科2名の計4名が在籍している（令和8年1月現在）。年齢構成は17歳から51歳までと幅広く、全盲の生徒が2名、弱視の生徒が2名で一人一人の見え方や疾病の状態、生活経験や社会経験は様々である。

将来的に国家資格取得を目指し、余暇時間や空き時間を自主学習に充てる生徒は多いが、卒業後の自立した生活や社会参加について具体的に想像したり、日常生活や余暇活動の情報を得たり、健康管理の意識をもったりすることが難しいという実態もある。卒業後も心身の健康を維持し、働きながら安定した日常生活を送るために、卒業後や将来に向けて必要な力（課題）は何かを明らかにし、将来の生活に結び付けながら段階的に指導・支援することにより、生徒が目指す目標に向かって自発的に取り組むことができるのではないかと考えた。

2 研究方法

- (1) 研究主題の共通理解と研修等の実施
- (2) 実態や課題の把握と情報共有、学部等との連携
- (3) 「動く」「実感する」「つなげる」場面の実践、評価

①動く	主体的に動き、学ぶことの楽しさ・面白さを味わう。
②実感する	体験や学びを通して、培われる能力・態度（視覚障害教育における基礎的・汎用的能力）を実感する。
③つなげる	自分で学びの意味や価値を判断し、将来の生活につなげる。

- ア 個別の生活指導計画と関連させた活動の設定
- イ 生活に関する情報の提供
- ウ 卒業生との交流（3年目）

3 生活指導の実践

- (1) 研究主題の共通理解と研修等の実施

全校研究会や研究部による寄宿舍説明会を通して、今年度の研究主題や概要を理解し、進め方を検討した。本校寄宿舍生に望む自立と社会参加の力、豊かな生活を送るために必要なこと、寄宿舍生活で取り組んでいる活動について、ワークシート形式で意見を出し合い、共有した。寄宿舍行事や諸活動を再確認するとともに、日常生活における重点や配慮点を共有し、今後も方法や内容等を検討しながら丁寧に進めていくことを共通理解した。また、学部での現状や課題、取組、方向性等について学びを深めるため、各種検討会や研修会では、事前に希望者を募り、積極的に参加した。さらに、舎内研修として教育専門監や視能訓練士、歩行指導員など、校内の専門職員を活用した研修を積極的に企画、実施した。視覚障害についての基礎知識と生徒支援についての共通理解がより深まり、学校と寄宿舍の連携強化につながった。

(2) 実態や課題の把握と情報共有、学部等との連携

今年度から担当する生徒が所属する学部グループ研究会にも参加し、翌日の舎内での打合せや寄宿舎研究会等で報告、共有した。生徒の実態や課題を洗い出すための方法として「コアプロブレムの活用」との意見が多く上がり、教育専門監による自立活動やコアプロブレムに関する研修会を実施した。コアプロブレムの見方や活用方法等を改めて学び、寄宿舎でもコアプロブレムを参考に生徒の実態や課題を共有、個別の生活指導計画に反映させながら、卒業後を見据えた個々の実態に応じた生活指導を行った。

また、生徒本人、部屋担当、主任寄宿舎指導員との三者面談を行い、卒業後の将来の生活についても話題にした。最初の面談では、将来どんな生活を送りたいかという質問に対し、将来の姿が想像できない生徒もいたが、10月の面談時には後期に向けた目標に加え、卒業後の進路や生活について話す生徒も出てきた。今後も将来の生活を考えるきっかけになるように、生徒の願いや希望の聞き取りを継続していく。

(3) 「動く」「実感する」「つなげる」場面の実践、評価

キャリア教育の3つの視点を元に、生徒が体験し、様々な体験から新たな学びや気づきを得られるよう生活指導の実践を行った。

ア 個別の生活指導計画と関連させた活動の設定

年間目標	自分の体の状態を知り、継続して体を動かす。	
手立て	<ul style="list-style-type: none"> ・ミーティング後の時間を活用（生徒、職員全員が同じ空間にいる環境）。 ・体育科教員と行っているストレッチを生徒が講師になり、舎監や寄宿舎職員など他者に教える機会を設定する。 ・無理をせず、楽しみながらできる環境づくりに配慮する。 	
生徒の変容	<ul style="list-style-type: none"> ・「今日も始めますよ！」と自分から周囲に声を掛け、進んで取り組もうとする姿や、成人生徒と一緒にウォーキングをするようになった。 ・甘い炭酸ジュースを控え、無糖の紅茶や炭酸水を購入するようになった。 ・音声付き体重計を使い、体の変化を意識するようになった。 ・部活動がない日の放課後、職員を誘ってストレッチをするなど、継続して体を動かそうという意欲がみられるようになった。 ・ヨガ教室へ参加したことで興味が膨らみ、ヨガの経験がある養護教諭から正しい体の動かし方やポイントを学ぶ機会につながった（写真1）。 	 <p>写真1 ヨガに挑戦</p>
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・実体験や学びを通して、本人の気づきや変容につながってきている。 ・舎監から、「頑張っているね」「昨日のストレッチ、楽しかったよ」と寄宿舎以外でも声を掛けられたり、褒められたりする場面が増えた。また、舎監や寄宿舎職員に教えることで、継続するきっかけや喜びにつながった。 ・健康に関する会話が增え、努力や頑張りを認めてもらう機会になった。 ・健康への意識が高まり、日常生活や食生活の改善につながった。 	
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・帰省した際に、一人でも運動を継続する。 	

イ 生活に関する情報の提供

生活支援の充実を図るため、生活に関する情報提供を具体的にどのようにしていくか、職員間で検討した。全員が集まり、生活集会や学習会をする場合、「成人生徒たちにとっては行事としての負担感が大きい」「生活経験や見え方の違いがある」「自立生活に必要な力は一律ではない」などの課題が挙がり、以下のように進めることにした。

目的	健康や生活面に関する最新の情報を伝える。
手立て	<ul style="list-style-type: none"> ・場面設定を工夫する。(月1回実施しているドリンクデーや集会の時間を活用する) ・学校、家庭、地域と連携して、最新の情報を伝える。 ・生徒が興味関心のある情報や、生活上の工夫を中心に話題提供をする。
生徒の様子	<ul style="list-style-type: none"> ・インスタントコーヒーの中蓋を活用した計量の方法を知り、家でも試してみたいという声が聞かれた(写真2)。 ・反射材付きの笛を紹介したところ、安全のために普段から携帯するようになった。 ・生徒同士で、普段使用しているスマートフォンの視覚支援アプリを紹介し、使い方や活用方法を学んだ。 ・日常の場面でも男性宿直指導員を交えて、衣類に関する配慮など、互いの経験談を伝え合い、質問し合う様子が見られた。 ・舎監から、経験談や生活面での工夫などを教えてもらい、安全に日常生活を送るための様々なヒントを得ることができた(写真3)。 <div data-bbox="1059 658 1378 904" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1075 913 1362 945" data-label="Caption"> <p>写真2 すりきりを体験</p> </div> <div data-bbox="1059 981 1378 1227" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1091 1236 1347 1267" data-label="Caption"> <p>写真3 舎監との談話</p> </div>
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・実体験やグッズの活用を通して、生活に必要な情報を知る学びの場面になった。 ・将来の生活に結び付けながら話題や情報を提供したことで、より深い理解につながった。 ・アプリの紹介など生徒が講師役となり、実際に使い方を紹介し、学び合う経験を通して、生徒同士で対話する機会が増え、話題を広げながら情報交換したり共有したりする姿が見られるようになった。 ・様々な人の経験談や生活上の工夫、社会とのつながりなどを学び、卒業後の生活や社会参加に向けた知識の習得や意欲が高まった。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に生徒が経験できるような場面設定や工夫が必要である。

ウ 卒業生との交流(3年目)

寄宿舍内での人との関わりに加えて、より広い人との関わりから学びや気づきを得ることをねらいとし、今年度も卒業生との交流を計画した。平成22年度に本校を卒業し、高等部理療科に勤務する職員との交流を12月に実施した。本校在籍時や進学先での生活の様子、寄宿舍生へのアドバイス、寄宿舍生からの質問に対する回答などの内容で進めた。

目的	卒業後の自分を想像したり、将来の生活につながる気付きを得たりする機会にする。
手立て	<ul style="list-style-type: none"> • 全員が参加できるように日程を調整する。 • 事前に卒業生への質問事項を聞き取り、生徒が知りたい情報や内容を中心に進める。 • 和やかな雰囲気的交流できるようティータイム形式で行う。
生徒の様子	<ul style="list-style-type: none"> • 校舎移転前と現在との生活環境の違いを知り、うなずいたり驚いたりする様子が見られた。 • 買い物の仕方や援助依頼の話を聞き、「参考にしたい」という声が聞かれた。 • 進路について、高等部普通科の生徒は「理療科に興味があるのか」と問われると、「ほぼ理療科に決めている」と答えていた。また、理療科教員に興味を示し、免許や資格に関して質問していた（写真4）。 • 会終了後もしばらく談話が続き、積極的に質問する様子が見られた。
成果	<ul style="list-style-type: none"> • 身近な人の経験談を深く聞くことができ、それぞれが将来の生活について具体的に感じたり考えたりするきっかけとなった。 • 他の卒業生からも色々な話を聞いて参考にしたいという声が聞かれた。 • 人との出会いやつながりが大切だと改めて実感できたようだった。
課題	<ul style="list-style-type: none"> • 聞きたいことや知りたい情報があふれ、設定した30分間では時間が足りなかった。時間配分や会の持ち方に工夫が必要だった。



写真4 卒業生に進路相談

4 研究のまとめ

(1) 成果

- ア グループ研究会や各種研修会、検討会等への積極的な参加や、教育専門監や視能訓練士、歩行指導員による舎内研修の実施により、生徒の課題が焦点化し、寄宿舍で取り組む手立てが明確になった。
- イ 日々の連絡調整等を通して、複数の目で多角的な視点での実態把握や情報共有、学部・分掌部との連携を強化することができた。
- ウ 舎監や養護教諭、栄養教諭など、校内の専門職員の協力を得て、生徒の将来に関連する情報を提供したことにより、自分にとって必要な力（課題）として、意識を高めながら継続的に取り組むようになるなど、生徒の変容につながった。
- エ 話題を提供したり考えたりする機会や実演したり学び合う経験を通して、生徒同士の対話や情報交換をする様子が増えた。異年齢の人と関わることによって深い学びにつながり、新たな気付きを得て、互いに共有できる場を設定することができた。

(2) 課題

- ア 様々な知識や情報を、実際に生徒が経験できるような場面設定や工夫が必要である。
- イ 見え方に対する合理的配慮について、寄宿舍職員間で共通理解を図り、将来の見え方を踏まえた支援を工夫していく必要がある。
- ウ 成人生徒の自立と社会参加に向けた実践場面の設定や生活指導の在り方を検討し、整理

していく必要がある。

(3) 次年度に向けて

- ア 今後も、積極的に研究会や研修会へ参加し、学部・分掌間と連携したつながりを重視しながら、生徒の変容や課題を把握、情報共有して生活指導・支援に努めていきたい。
- イ 卒業後や将来の生活を具現化できるように、異年齢の人との関わりや社会とのつながりを大切にしながら、生徒が目指す目標に向かって自発的に取り組めるよう生活指導・支援の充実を図っていきたい。

あとがき

本年度の研究報告書をここに刊行できますことを、大変うれしく思います。本校では、「視覚に障害のある幼児児童生徒の自立と社会参加に向けた指導・支援の充実」を研究主題として、日々の教育実践に根ざした研究に取り組んでまいりました。幼児児童生徒一人一人の見え方や発達段階、生活経験の違いを踏まえながら、将来の生活や進路を見据えた指導の在り方について、全校で共通理解を図りつつ実践を積み重ねてきたところです。特に本年度は、キャリア教育全体計画を活用した授業づくりを研究の柱とし、各学部において学びのつながりを意識した取組を進めてまいりました。日々の授業とキャリア教育の視点とを関連付けることで、幼児児童生徒が自己の成長を実感し、主体的に学びに向かう姿が見られるようになってきたことは、大きな成果であると感じております。また、授業実践の検証と改善を繰り返す過程において、教職員一人一人が専門性を高め、指導や支援の在り方を見つめ直す機会ともなりました。本研究を進めるに当たり、御指導、御助言を賜りました秋田大学 前原和明教授、関係諸機関の皆様に心より感謝申し上げますとともに、日々の教育活動の中で真摯に研究に取り組んできた教職員の努力に深く敬意を表します。本報告書にまとめられた成果と課題を全校で共有し、次年度の実践へと確実につなげていくことが、幼児児童生徒の自立と社会参加を支える教育のさらなる充実に結び付くものと考えております。

教頭 近江 龍静

令和7年度 研究報告書「あゆみ」第46号

発行年月 令和8年3月

発行所 秋田県立視覚支援学校

〒010-1409

秋田市南ヶ丘一丁目1番1号

TEL 018-889-8571

FAX 018-889-8575

メール shikaku-s@akita-pref.ed.jp

ホームページ <http://www.kagayaki.akita-pref.ed.jp/>